

Report on International Symposium
Place-Based Education for the Sustainable Future
“From Knowing to Actions”

January 2016

国際シンポジウム報告書
持続可能な社会の形成に向けた「場の教育」
「知っている」から「行動」へ

特定非営利活動法人 ECOPLUS
ECOPLUS, a registered NPO in Japan

目次

事業概要 About the event	3
はじめに Foreword 高野孝子（早稲田大学）TAKANO Takako , Waseda Univ.	4
開会のことば Opening Remarks 阿部治（立教大学） ABE Osamu, Rikkyo Univ.	6
第 1 章 基調講演	9
Chapter 1, Keynote Speeches	
基調講演 1 サイモン・ビームズさん（英国エジンバラ大学）	10
Keynote Speech 1 Dr. BEAMS Simon , University of Edinburgh, Scotland	15
基調講演 2 アンバ・ジャミールさん（インド、環境弁護士）	20
Keynote Speech 2 Mr. JAMIR Amba, Nagaland, India	25
基調講演 3 桑子敏雄さん（東京工業大学）	30
Keynote Speech 3 Prof. KUWAKO Toshio, Tokyo Institute of Technology	
基調講演 4 ルース・オン・ウェイ・リンさん（シンガポール、ラッフルズ学園）	34
Keynote Speech 4 Ms. Ruth Ong Wei Lin, Raffles Institute, Singapore	39
分科会まとめ Summary of Sectional Meetings	44
ランチミーティングまとめ Summary of Lunch Meetings	48
第 2 章 パネル討論	49
Chapter 2, Discussions	
論点整理 安藤聡彦さん（埼玉大学）	50
Points of Concerns Prof. ANDO Toshihiko, Saitama University	53
パネル討論 Panel Discussion	56
参加者の声 Voices of participants	64

本報告書では、敬称を一部省略させていただきました。

事業概要

About the event

On January 23-24, 2016, Waseda University, Tokyo, Japan
Organized by Ecoplus, a registered NPO in Japan
Co-organized by Center for International Education, Waseda University
Supported by Japan Fund for Global Environment

International guest speakers;

Dr. BEAMS Simon, Edinburgh University, Scotland
Mr. JAMIR Amba, Nagaland, India
Ms. Ruth Ong Wei Lin, Ruffles Institute, Singapore

Guest speakers;

Prof. KUWAKO Toshio, Tokyo Institute of Technology
Prof. OMORI Susumu, HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

Committee members;

Prof. ABE Osamu, Rikkyo University
Prof. ANDO Toshihiko, Saitama University
Dr. ITAGAKI Jumpei, Kobe University
Dr. KIMATA Mikio, Fellow, Tokyo University of Foreign Studies
Dr. SASAKI Toyoshi, Kurikoma Kogen Nature School,
Mr. SAKUMA Norio, Nature Conservation Society for Dewa Mountains
Dr. TOYODA Mitsuyo, Niigata University
Mr. YOKOYAMA Ryuichi, Nature Conservation Society Japan
Prof. TAKANO Takako, Waseda University

日時：2016年1月23日（土）、24日（日）

場所：早稲田大学（大隈講堂小講堂、国際会議場ほか）

参加者数 98名（23日参加人数86名、24日参加人数60名、のべ166人）

海外ゲスト

サイモン・ビームズさん（英国エジンバラ大学）
アンバ・ジャミールさん（インド、環境弁護士）
ルース・オン・ウェイ・リンさん（シンガポール、ラッフルズ学園）

国内ゲスト

桑子敏雄さん（東京工業大学大学院教授）
大森享（すすむ）さん（北海道教育大学教授）

企画検討委員

阿部治・立教大学教授 安藤聡彦・埼玉大学教授 板垣順平・神戸大学学術研究員
木俣美樹男・東京学芸大学名誉教授 佐々木豊志・くりこま高原自然学校代表
佐久間憲生・出羽三山の自然を守る会代表 豊田光世・新潟大学准教授
横山隆一・日本自然保護協会参事 高野孝子・早稲田大学教授

主 催：特定非営利活動法人 ECOPLUS

共 催：早稲田大学留学センター

後 援：日本環境教育学会、日本野外教育学会、日本環境教育フォーラム、日本エコツーリズムセンター、NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）

助 成：独立行政法人環境再生保全機構 地球環境基金

はじめに Foreword

特定非営利活動法人 ECOPLUS 代表理事
早稲田大学留学センター教授
高野孝子

専門分野はサステナビリティ、野外・環境教育。長く人と自然の関係に注目し、その文脈で「地域に根ざした教育」を提唱している。

人と自然の交わる分野に造詣の深い方々何人かで、「地域に根ざした教育」について考える研究会を立ち上げたのが2011年。その後毎年、地球環境基金の助成を得て、国内外のさまざまな立場や分野の人たちと集う会を開催してきました。

本報告書は、同じ委員会として企画した、5回目のシンポジウムの中身をまとめたものです。時間的、物理的制約で、会場に足を運び、時間を共にできなかった方々にも、エッセンスを汲み取っていただければと思っています。また、参加した人たちにも、あらためて振り返り、今に続くご自身の行動を見つめていただければと願っています。

私は“Place-Based Education(PBE)”という用語を、「地域に根ざした教育」という日本語にして使用してきました。その時には一つ一つの用語にまつわる議論について、深く吟味した上で選んだわけではありませんでした。“place”という英単語の意味も長年議論されてきていますが、「地域」という言葉もまた、多くの解釈が可能であり、あらためてその意味することを考えざるを得ません。そのおかげで、視野が広がったことは言うまでもありません。

本シンポジウムでも、言葉の使い方についての指摘がありました。定義にこだわりすぎることなく、中身を進めていこう、と。これは例えば「持続可能な開発」など、議論が噴出する他の多くの用語にもあてはまると思います。しかし、ある用語で何を意図しているのか、意味しているのかの確認なしに、互いに手を携えて進むことは危険でもあるし、具体的に進めるならば、いずれすり合わせる必要が出てくると思います。

このあいまいさがあったからこそ、PBEの研究会では、それについて積極的に意見交換することが大切でした。それぞれの立場で、当たり前と思って口にしていたことを表現しながら、互いに修正し、課題を見つかる中で、多くの人たちに届く説明をしていけるのではないかと考えたのです。よくわからないこの用語の核心に近づけることを期待しました。

この5年間で、「地域」や「場に根ざした」という表現が、多様な分野で多く使われるようになってきたと感

The term “place” of “place-based education (PBE)” has generated discussions over the years in various disciplines, so has the Japanese word I used to translate it. During this symposium, it was suggested that not to tangle up too much what it means but let's get working, which applies to many other controversial terms including Sustainable Development. I totally agree, but at the same time, in working together, sooner or later we would need to confirm whether we are moving towards the same direction.

It was amid of ambiguity when we started the research committee regarding PBE in 2011 in order to actively exchange thoughts so that we might be able to find to the explanation which is more understandable to many people as well as to figure out what lies in the core of the concept.

In the past five years, we began to hear the term “communities” and “place-based” very often in various fields including mass media and politics. Each meaning each time seems to be different and their meanings seem to be changing as time goes. In the meantime, thanks to communication with many brilliant thinkers, we began to see the outline of PBE. The symposium this time even widened what we can see, including uncertainty and issues. I personally realized that we still have a lot of work to do to understand the meanings and risks of PBE in the context of globalized and de-placed daily lives.

The subtitle of the symposium was “From knowing to Actions”.

Many of us in the world are in frustration in many issues why things do not go forwards even though we understand and know much more than before. Dr Ando, a committee member, sharply stated the point in the symposium, which is recorded in this report.

Has environmental education, which has been

じます。報道や政治の場でも聞かれます。それぞれの意味は違っているようで、かつ時に連れて変化もしているように感じられます。その間、意見交換をしてきた優れた思考者らのおかげで、少しずつ、「地域に根ざした教育」の形が見えてきたと思います。そして今回のシンポジウムで、さらに見える部分が広がりました。加えて、何があいまいで、課題なのかもわかってきたように思います。

「地域に根ざした教育」がはらむ、グローバリゼーションの中での意義と危うさについて、もっと検討が必要という点がはっきりしたことは、私自身にとって収穫だったと感じます。

今回のシンポジウムの副題は、「知っているから行動へ」でした。

世界でも国内でも、わかっているのになぜ物事が前に進まないのかというフラストレーションがあります。シンポジウムの中で、当研究会のメンバーでもある安藤聡彦さんが的確に整理しています。知識も技量も研究も進んでいるのに、自然環境保全は20年前より改善されているのか。何十年にもわたって重要だと言われてきた環境教育は、現状をより良い方向に変えることに役立ってきたのか、と。

「地域に根ざした教育」についても、あちこちで表現を聞くようになったものの、それが社会を変えていく力になっているのかはわからないままです。このシンポジウムでは、実際に何が起きているのか、また変化を起こすためにはどうしたらいいのか、それらを見つけ合う場となることを目指しました。

基調講演、分科会、パネルディスカッションと、二日間にわたって約100名の方々が直接関わってくれました。そこで生み出されたエネルギーの大きさを、この報告書をまとめるにあたって再び感じています。

今回の会議では、ゲストのみなさんには、事前から入念にご準備いただき、刺激的で価値あるシンポジウムにさせていただきました。集った方々はそれぞれ、経験に裏打ちされた貴重な意見を自由に交換してくださり、研究会のメンバーのみなさんからは、議論を深め、かつ整理させていただきました。実施にあたっては、早大生をはじめとする大勢の若い人たちから、多大なサポートをいただきました。どなたが欠けても、今回の場はこれほど意味あるものにならなかったと思います。心から感謝申し上げます。

シンポジウムに関わったすべての方々が、ここでの出会いや気づきを、行動に活かしてくださることを祈念しています。

Professor, Center for International Education, Waseda University
Executive Director, ECOPLUS
TAKANO Takako

Her expertise is sustainability and outdoor/environmental education. Takako has long been interested in human-nature relationships, and promotes place-based education in the context of sustainability.



repeatedly stated as important in many international conferences, helped situations in society and the environment shift any better? We now often hear the term PBE, but it is not certain whether it generates a change in society for better.

This symposium wanted to offer an arena to discover what is happening in small sections of the world, and what we can do to actually make a difference.

About 100 people participated in the 2-day symposium, and I once again realize the huge energy created by their interaction through compiling this report.

I conclude the remark with a hope that this report becomes a trigger for both participants and readers to reflect what you have gone through, and what more you can do from now.

開会のことば Opening Remarks

阿部治・立教大学教授
ABE Osamu, Rikkyo University



日本環境教育学前会長。持続可能な開発のための教育（ESD）の国内外での推進を図っている。

Former Chair of the Japanese Society of Environmental Education. He promotes Education for Sustainable Development, or ESD.

私たちが地域に根ざした学び（PBE, Place-Based Education）の研究会を組織し、5年が経ちました。毎年、国際シンポジウムを開催し、海外の方々、国内のいろいろな地域の方々と連携、共同しながら、議論を深めてきました。

しかし、この5年間だけでも、日本と世界との「持続不可能性」が、ますます進行してきています。この問題の解決に、PBEが大きな役割を持っていくのではない、そういう確信をますます持ってきています。PBEと密接に関連する「持続可能な開発のための教育（ESD）」に関する国連の10年間の取り組み、DESDが2014年に最終年を迎え、「ポスト DESD」の新たな段階に入ってきています。

ユネスコ、そして国連は、ポスト DESD として、5つの優先分野を含めたグローバルアクションプログラムを決め、5年間取り組むとしています。日本政府はようやく、グローバルアクションプログラムの国内版を3月までにまとめ終える予定で、つい先だってパブリックコメントが終わったところです。このなかで特に強調されているものは、マルチステークスホルダー間の連携と持続可能な開発政策への ESD の統合、さらには持続可能なコミュニティ作りを通じた ESD の推進です。これらを進めていくために、地域が必要とする ESD の取り組み支援、情報や提携の共有をすすめる「ESD 支援センター」が、今春設立されます。これは ESD を通じて持続可能な地域作りの具体化を支援することを目的に、私ども NGO がとても大事なことだとして政府に提案してきたものです。

さて、今日の日本の社会構造の中で、ESD を進めていく上で、特に重要な視点が2つあると思います。1つは自然災害に対する対応です。すなわちレジレントな社会の構築です。これは東日本大震災からの復興、再生、これはもちろんであります、近年はおそらく気候変動のものだと思われる、自然災害が多発しています。その適応策を含めた、レジレントなコミュニティ作り、これは本当に緊急の課題です。

It has been five years since we organised the collegium of Place-Based Education. Every year, we hold international symposium and deepen the debate on it cooperating and collaborating with guests from overseas and people from different regions in Japan.

However, even in this five years, there is a progression of “Unsustainability” of Japan and the World. To solve this problem, I have become increasingly convinced that PBE could play essential role. DESD, which was the 10-year-long effort by United Nations about “Education for Sustainable Development, ESD” closely related to PBE, commemorated its final year in 2014, and it's been a new stage of “Post- DESD.”

UNESCO and United Nations designed the Global Action Program as Post- DESD, including 5 priority fields, and are going to work on it for 5 years ahead. Japanese government is eventually summarising the national Global Action Program by the end of this March and just made the public comment recently. In this comment, Japanese government especially emphasised to collaborate among multi stakeholders, integrate ESD with development policies, and promote ESD through developing a sustainable community. To progress them, “ESD support centre”, which supports ESD actions that local place needs and share information and collaboration, is to be established this Spring. This is what our NGO has kept proposing to the government in order to support to crystallise building a sustainable community through ESD.

Well, I think there are two important perspectives to promote ESD in today's Japanese social construction. One is to response to natural disaster. It means to build resilient society. It includes

もう1つは少子化、高齢化に伴う、人口減による地方の衰退です。この問題は地方にとどまらず、大都市の衰退も招きうる、日本が直面する最大の危機となっています。地方の衰退によってコミュニティが持続不可能になり、一次産業の崩壊、あるいは生物多様性の崩壊、地域の伝統知や文化の破壊などが同時に進行しています。

一方、国際的にも、貧困や平和や環境といった、持続可能な開発に関わる実に多くの問題が山積み、これらは急速に悪化してきています。このため、国連は昨年の総会において、持続可能な開発目標2030、いわゆるSDGsを採択し、取り組みを今年から始めています。ここで示された17の目標、これはすべて私たちを取り巻く、あらゆる課題を含んでいます。また昨年末のCOP21パリ合意では、SDGsとも密接に関係する二酸化炭素の排出量を今世紀末までにはゼロにする、という非常にチャレンジな目標を掲げていました。

SDGsやCOP21のパリ協定、これらは国際的なアジェンダですが、先ほど述べたレジレントなコミュニティづくり、あるいは持続可能なコミュニティづくり、これとSDGsやCOP21は密接に関わっています。つまり、これらを地域にどう具体化していくのか、それはローカライズ、あるいはグローカライズ、と言えるかもしれませんが、これらが問われています。学校教育や社会教育、さらには地域における教育学習、これらをつまみノンフォーマルエデュケーション、インフォーマルエデュケーション、フォーマルエデュケーション、これら3つを統合し、そしてSDGsやあるいはCOP21、といったものと連動させていくことが非常に大事です。

実は先々週、インドのアーメダバードで、SDGsとESDの統合を図る国際会議がありました。これらはインド政府、あるいはインドの市民団体、ユネスコ、ユネスクが共催したのですが、SDGsの17の目標、これをすべてESDで読み解く、という世界ではじめての会合でした。私も参加してきましたが、まさにこのESD、あるいは教育、人づくり無しでは、持続可能な社会はできないということを、本当に参加者一同が確認した次第です。

持続可能な地域作りに果たすPBEの役割については、これまでの国際シンポジウム、あるいは様々なワークショップや報告書等で確認してきました。しかし、今、政府によって進められている地方創生、これは目先の地

of course recovery and reconstruction from the Great East Japan Earthquake, and there are also many natural disasters probably caused by Climate change. This is truly an urgent need to build resilient community to adapt these problems.

The other is a decadent regions with falling birth rate, ageing population, and depopulation. This is the greatest danger that Japan is facing because it may also cause a decline of larger cities. Falling local places makes community unsustainable, collapse primary industry, breakups ecology and destruct local traditional places and cultures correspondingly.

On the other hand, there are a lot of international obstacles like poverty, peace and environment, which are related to achieving sustainable development and they are rapidly going wrong. Therefore, United Nations adopted Sustainable Development Goals 2030; SDGs at the general assembly last year, and put it into effect from this year. The seventeen goals in it cover all problems around us. Moreover, in the 21st session of the Conference of the Parties (COP21) in Paris last year, it was set a very challenging goal to zero CO2 emission by the end of this century closely related to SDGs.

SDGs and the Paris Agreement in COP21 are international agendas but closely related to build resilient and sustainable community that mentioned above. It has been tested how we localise or glocalise them in local places. School education, social education and educational learning in local places; formal education, non formal education and informal education, it is greatly important to integrate these three types of education and work with SDGs and COP21.

The week last before, There was an international conference which tried to integrate SDGs and ESD. It was hosted by Indian government, indian civic group, UNESCO and UNEP and the first assembly in the world to interpret all the seventeen goals of SDGs by ESD. All the participants including me confirmed that ESD, education and human development are the absolute essentials to achieve

域活性化、すなわち経済的活性化が先行し、日本のこのアンバランスな人口動態を作った、それと同じスピードで進められています。そして残念ながら、人づくりの視点がほとんど欠落しているのではないかと私は思っております。

繰り返して言いますが、フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルという3つの教育、学習の場の統合による人づくり、これが地域の持続性、すなわち内発的発展には、極めて重要なのです。またSDGsといった国際的な新たな動きが出てきた背景の中で、今年のテーマである、ESDとPBEは、まさに理にかなったテーマだと私どもは考えています。

このような大きな視点と同時に、環境教育や野外教育、自然環境保全といった足元の自然とどう関わっていくのか、この意義を常に確認していくことも必要です。その意味で今回4つの分科会を設定しました。実りの多い、討議になることを私どもは期待しています。

最後に遠く、イギリス、インド、シンガポールからいらした、サイモン・ビームズさん、アンバ・ジャミールさん、ルース・オン・ウェイ・リンさん、さらに国内からお越しいただいた、桑子敏雄さん、大森亨さん、これら基調講演者の皆さんに深く感謝いたします。またこの年度末の大変忙しい中、この貴重な週末に参加して下さった、参加者の皆様に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

Sustainable Society.

As for the role of PBE for sustainable development of regions, we have confirmed how important it is in the international symposium before and in the various workshops or reports. However, the building a community recently conducted by Japanese government has been an immediate local revitalisation; economical regional revitalisation and has been progressing at the same speed with the one which made unbalance demographics in Japan nowadays. In my opinion, there is unfortunately a lack of perspective of developing human resources.

Again, it is extremely important to develop human resources for sustainability of local places and spontaneous development by integrating three educational and learning places; formal, non formal and informal. Given the international new movement like SDGs, ESD and PBE are reasonable as the themes for the symposium this year.

At the same time with this large perspective, we also need to confirm meaning constantly of communicating with nature rooted in the local place represented as environmental education, outdoor education and natural environmental conservation. In that sense, we set up four section meetings this time. We expect you have meaningful discussion with other participants.

Lastly, I deeply thank Dr. Simon BEAMES, Mr. Amba JAMIR and Ms. Ruth ONG Wei Lin from Scotland, India and Singapore respectively, and Prof. KUWAKO Toshio and Mr. OMORI Susumu from Japan. And I also thank from the bottom of my heart all the audience for participating the symposium on the weekend at this hectic end of fiscal year. Thank you.

Chapter 1

基調講演とパネル討議

Keynote Speeches and Panel Discussion

January 23 Saturday

10:20	開会挨拶 阿部治・立教大学教授	Opening remarks Prof. ABE Osamu
10:30	経過説明 高野孝子・早稲田大学教授	Background briefing Prof. TAKANO Takako
10:45	基調講演 サイモン・ビームズさん	Keynote 1 Dr. BEAMS Simon
11:25	基調講演 アンバ・ジャミールさん	Keynote 2 Mr. JAMIR Amba
12:10	休憩 Break	
13:05	基調講演 桑子敏雄・東京工業大学教授	Keynote 3 Prof. KUWAKO Toshio
13:50	基調講演 ルース・オン・ウェイ・リン	Keynote 4 Ms. Ruth Ong Wei Lin
14:30	分科会 ①自然保護活動；地域の自然を知る価値 ②学校教育；地域に根ざす学び PBE は学校を変えられるか ③ふるさと再発見；日本各地の風土、地域に根ざした学び ④冒険教育；冒険のディズニー化。PBE はどうあらがえるか	Sectional Meetings Nature Conservation Formal Education Rediscovery of home Adventure and Disneyization
17:00	分科会報告 Sharing	
18:00	レセプション Reception	

21 世紀における場の教育

スコットランド エジンバラ大学 サイモン・ビームズさん

エジンバラ大学シニアレクチャー。カナダ出身。マレーシア、香港、米国などでの 23 年に渡る豊富な指導体験を持つ。体験学習、野外教育・環境教育を出発点に、持続可能性教育までの幅広い領域で活躍。「Learning outside the classroom (教室の外での学び)」などの著書がある。



おはようございます。組織委員会の方々に今回お招きいただいたことを感謝申し上げます。ここでお話できることをとても光栄に存じます。また高野さんと大前さんにも、私が気楽に来れるような準備をしていただき、お礼申しあげたいと思います。

私は、カナダ人ですが、英国スコットランドに住んでいて、ここには地域に根ざした学び (PBE) についてお話するためにやって来ました。PBE について私が何もかも知っているわけではありません。しかしこれまで多くの文献を読み、考え、また論文も発表してきました。私が話す中から皆さんが 1 つか 2 つでも見つけていただき、仕事などに活かして頂ければと思っています。

いまなぜ PBE なのでしょう。さきほど高野さんが話したように、PBE に関して多くの議論や文献などが出されるようになりました。教室外での学習、学校教育、野外・冒険教育、環境教育、などさまざまな場所での議論がされていて、PBE の実践は、もはや稀なことではなくなっています。

しかし同時に、広く使われるようになった PBE という言葉は本来の意味や価値を失いつつあるように見えます。今日は、PBE についてのより良い議論ができるように、具体的な用語を提示したいと思います。そのために、PBE の 3 つの段階についてお話することから始めます。

PBE の 3 段階

第一段階は PBE の基礎となるもの。その次は批判的で変革的な PBE、そして 3 段階目は、批判的かつ国際的な PBE です。この 3 段階目は私がわずか 1 年半ほど前に出くわしたばかりのものです。そして話の最後に、みなさんが実践するにあたって検討してほしいことをお伝えしたいと考えています。

この写真は、高校の教師を目指しているエジンバラ大学の学生たちです。数学の授業です。大学の外です。エ



ジンバラ市の都市環境の中で、ロイヤルマイルという古く賑やかな通りの傾きを測っているところです。誰もが知っている地元の場所を使って数学をしているのです。

西欧での PBE のルーツはどこにあるのでしょうか。70 年代

や 80 年代、場についてのほとんどの文献は概略的なもので、人文地理学や哲学の視点からが多いです。その中の第一人者、イーファー・トゥアン氏は、「空間というのは物語のない場所のことだ」と言いました。つまり、場所には物語があり、それが無い空間はからっぽだ、ということです。その後 1990 年代から現在にかけてこのような哲学的な視点に教育的な意味が加わるようになりました。1990 年代に、「場」の概念に教育が加わったのです。

今朝アンバさんとちょっと話していたのですけれども、なぜ 30 年前に PBE というものはなかったのでしょうか。それは必要なかったからだろうというのが私たちの結論でした。つまり、そうした PBE というのは自分の文化的な日常の中で自然に行われていて、それが世代から世代に受け継がれていた。でも今はもう、そうではないですね。ここで注意を促しますが、日本語での「場」や PBE に関する文献は、英語のものよりもっと古くから存在しています。残念ながら、私の漢字の力が足りず、読めないのですが。

ではこのような PBE に関する関心が高まっているのはなぜでしょうか。先ほど、昔は PBE は必要なかった、と申しあげました。『A pedagogy of place (場の教育学)』という本を書いた、マイク・ブラウンとブライア

ン・ワッチョウは、これはすべて現代性 (modernity) と関係があるとしています。私はアマチュアの社会学者としてこの現代性という言葉にとっても興味があります。これは「遅れてきた現代性」あるいは「流動的な現代性」などと言われたりもします。つまり今世界はあまりにも早く変化しているので若い人たちは自分たちの場と切り離されてしまっている。皆さんも多分日常のなかで若い人との関わりながら感じておられるのではないのでしょうか。ロンドンであっても新宿であっても、若者たちはその「場」よりもむしろスクリーンに興味があって、スマホや携帯電話に目を吸い寄せられながら歩いています。そうでしょう？どこに行っても同じです。

Three Levels of Place-Based Education (PBE)

- Knowing our places
- Transforming our places
- Sharing stories of our places with 'global others'

さきほど、3つのPBEのレベルがあると申し上げました。1つ目は自分の場をよく知るようになるということ。2つ目はそれをよりよくするために変革していくということ。3つ目は我々のストーリー、こういった場の物語を遠く離れた人と共有する、つまり世界の他の人と共有するということです。

こちらの写真は、また別の、教師教育の様子です。場に根ざした数学、科学、歴史の授業です。これらはすべて、学校から200メートル以内で実施しています。大きな出費も必要ありませんし、何百キロも離れた山岳地



帯に入っていくための面倒な段取りもありません。このタイプの場の教育は、野外であり、かつ地元の文脈の中に深く根ざしているのです。

ではPBEの最初のレベルについて考えてみましょう。まずこれは「教育」についてであって、「学び」とは違います。というのはここには学習成果についての意図があり、かつ教育者も介在します。次に、遠くの事についても、近くの事についても、そしてその間にあることについてもが対象です。三つ目に、過去も現在も、そして将来についても見ていきます。四つ目に、「場」、場所そのものが、教育理論として利用できるということです。これはある種の教え方であり、すべての教科をまたいで使うことができます。算数、科学、地理学、言語、歴史、アートそういったものすべてです。5つ目に、PBEは、土地と生態系と人間との関わり合いを対象とします。すべて融合させていきます。

Key 'first level' PBE Assumptions

- It's about education (not only learning)
- It involves the near and far, urban and rural (and everything in between)
- It considers the past / present / future
- It can be used across the curriculum
- It encompasses interactions between land, humans, ecology
- It requires a certain amount of 'dwelling' and 'responding'

「居住 (dwelling)」という言葉はPBEの中で良く使われます。つまり、ある場所で良く生きるということは、そこで暮らすということが欠かせません。そこで時間を使わなくてはなりません。PBEが価値を持つのは、その場の事を知るために時間をかけることができる時です。「あれはシラカバの木ですよ」、「こちらは1850年の建物です」などと、ツアーガイドによって示されるようなやり方ではなくて。効果的なPBEのためには、きちんとその場にいて、その場所について知る必要があります。

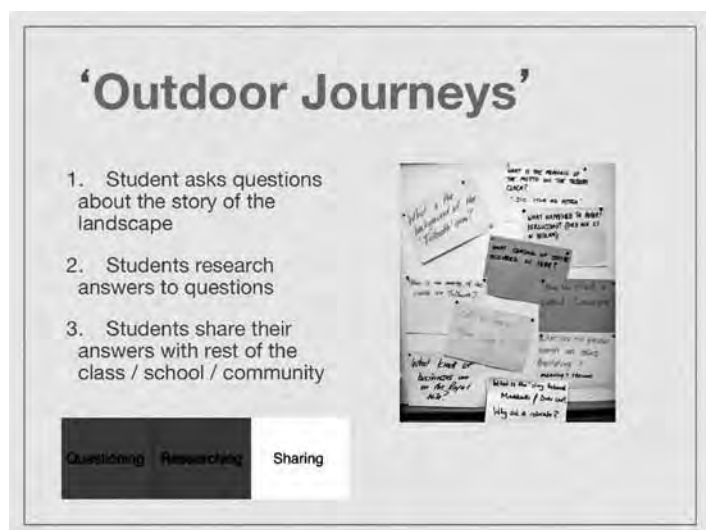
アウトドア・ジャーニーズ

PBEの1つのやり方の例を簡単にお示しします。これは小学3年生から原生自然ガイドまで、どんな人とも実践するやり方です。「アウトドア・ジャーニーズ (野外での旅)」と呼ばれる、とてもシンプルな枠組みで、問う、調べる、分かち合う、という3つの段階からなっ

ています。

「問う」にはまず、外に歩いていくことです。この大隈講堂の美しい扉から外に出ると想像してください。そして質問するのです。この参加者みんながですね、外に出て、景色を見て不思議なことを書き出します。生態系の質問でもいいです、この生きている環境についてです。あるいは歴史に関することでもいいでしょう。それからこの場に戻り、その質問を壁に張り出します。ここから第二の段階「調べる」が始まります。解を探すの

りではなかったということを、きちんと認識することです。例えばカナダ、あるいはスコットランドにおける土地の使用がそうです。カナダにおいてはフランス人とイギリス人が、その土地の先住民を搾取した。またスコットランドでは、イングランド人または裕福なスコットランド人が、スコットランド農民たちを農地から追いやったという歴史があります。そういった過去の凶悪な出来事をきちんと認めることがとても大切です。10歳や15歳では、それらに起因する問題を解決するのは難しいかもしれませんが、理解することはまちがいないその第一歩です。



です。インターネットで検索したり、お年寄りに聞いたり、印刷物や古い地図など見て研究します。いったん答えが出たらみんなとそれを共有するわけです。「分かち合う」のが第三の段階です。ここまでで、このある特定の場所について、それぞれの人にとって意味を持った、様々な知識をみんなで共有することができます。このやり方によって、学び手が主体性を増し、何について学びたいのかを自分で決める力を持つことになります。このPBEのシンプルなフレームワークは、問いを書き出すことや、調査して答えを見つけること、他の人たちと知を共有することを含みます。(www.outdoorjourneys.org.uk)

知るから行動へ

ここまでPBEの最初のレベルについて話してきました。二つ目のレベルは、場を知ることではなく、「行動する」ということです。場を知るだけでは不十分です。この場の何が問題で、もっと良くするにはどうしたら良いのか。ここには、もっと市民的な視線、あるいは政治的な視点が登場します。そして、権力や機会の不平等などについて、深く探究していきます。

この第二レベルには、いくつかの重要な概念があります。1つ目は、脱植民地化 (decolonization)。ある場について過去を見てみると平等あるいは公平なことばか

Two key concepts:

Decolonization: Learning to recognise disruption and 'injury' -- and to address these causes

Reinhabitation: Learning to live well socially and ecologically in these places

2つ目の概念は、暮らし直し (re-inhabitation)。どうやったら社会的にお互いよりよく生きていけるのか、また生態的にもよく持続可能な形でみんなが生き、その結果、次世代も良く生きることができるようになるのか、と考えることです。

「コミュニティに根ざした教育」はこのPBEから派生していると言われています。これは市民権という大きなテーマを持ち、コミュニティの様々な問題に着目をして、解決のために行動する方法を考えます。

もともとは、地元の団体で取り組めることで、例えば、学校の食堂で、生徒たちの並び方をより合理的にするなどです。または、外部の組織や公の建物、屋外の場所で学ぶこともできます。このように見るとつまり、教育というものは学校の建物の中でだけ起きるのではないし、コミュニティのメンバーが共同の教育者になるということです。先生が全部知っているということではなく、近隣の住民の技術や知識も引っ張ってくるのです。環境保全やコミュニティサービスプロジェクトには、こうしたやり方がよく使われます。他にも例えば、地元の企業を通じた学びも、おもしろい機会となるのではないかと考えています。スコットランドでは企業教育 (Enterprise education) と言われています。コミュニティに根ざした教育はもちろん、文化イベントや芸術などの分野でも可能です。

ここまではいい話です。PBEは第一のレベルである

場所の事を知り、そして第二のレベルで行動を起こす。ここまで説明した PBE は、驚くような社会的な背景の中で存在しています。例えば、現在の教育政策は非常に硬直的で、世界中同様です。カリキュラムはますます狭くなっていて、誰もが試験のために教えています。その論理に従いますと、世界中の多様な国において、生徒たちはまったく同じ数学の問題、科学、公式、言語を学んでいることになってしまいます。カリキュラムが狭くなるにつれ、教師の裁量といったものがなくなります。

Difficulties with PBE in 21st century...

- Risk society
- Hyper-modernity
- Liquid times
- Mobile lives
- Commercial influences / consumer culture
- Rigid, prescribed education policies



そして多くの場合、場所、文化、自然といったものが置き去りにされていきます。

流動化するグローバル社会で

また今の時代では、あらゆることがどんどん変わっていきます。何も確実でなく、何もじっとしていない、流動的な時代です。祖父母の時代は生涯雇用であり、生涯同じ家に住んでいました。しかし、今の10歳でも15歳でも尋ねれば、少なくともカナダや英国では、大人になった時に何をしているか、どこに住むかわからないと言うでしょう。何もかも変化しているからです。

これらの課題は、私たちが地球市民として直面している巨大なチャレンジと同時に起きているのです。少し前に、阿部教授が持続可能な開発のための教育について話されました。そして、気候変動に伴う地球的課題は、どの国に住んでいようと関係なく、大きなものです。どのように対応したらいいのか。人々の生活様式を変える大企業の力に、どう対応していくのか。大きな多国籍企業は、世界の反対側で労働環境を変えました。非常に劣悪な環境で暮らしている人たちは移住せざるを得ず、家族を置いて何千マイルも離れた場所で働くことになっています。ヨーロッパや中東でこうしたことが起きているのを目撃しています。宗教に起因した戦争も起きている。こういったグローバル問題というのが同時に発生しています。これまでお話した様々な困難な状況に関わらず、

私たちがいる場所のために、ある場所を通して教育をしていくことは、絶対的に不可欠なのです。

場に応答する教育 (PRE)

ところで、「A pedagogy of place」の共著者であるマイク・ブラウンは PBE は PRE (Place Responsive Education – 場に応答する教育) であるべきだと言います。Responsive という言葉は行動を示唆するからです。

では PRE の第三のレベルを考えてみましょう。これは私にとっても新しい内容になります。「世界の市民」を生み出す、ということに関係します。

上述のように、私たちは地球規模の課題に面しています。ですから、自分の場所を知ってそこを変えるだけでは足りないのです。世界と繋がっていかなくてはなりません。と言うのも、グローバルに起こることがいずれローカルな地域に影響を与えるからです。言い換えれば、自分の場での PBE と行動を、より広い、グローバルな物語の中に位置づけていく、ということになります。

この第三のレベル、クリティカルコスモポリタニズムは、地元の現象を、地球的な影響を持つ広い文脈の中でとらえます。地球的な影響を持つものとは例えば、資本主義や気候変動などです。足元の場所がどのように遠い

A third phase: 'Critical Cosmopolitanism'

- Over-arching goal is to create citizens of the world
- Key = Fusing locally-situated practices and 'global others'
- Understanding local issues within the broader context of the global influences
- Meanings made are distributed through tools -- mostly technological

場所によって影響を受けるかは、物語を共有することによって学ぶことができます。幸運なことに、スカイプや Wiki など、様々なオンライン手法を使って情報を共有することが出来ます。新宿の人が新宿の物語を、アンバさんが来たナガランドの人に共有することが出来るわけです。

もはや自分の場所で起きていることだけを知り、その場所を変えようとするだけでは十分ではありません。世

界は、他の場所で起こっていることも知っている市民を必要としています。「持続可能性のための教育」の研究によると、若者たちが自分の取る行動とそれから生じる結果のつながりを理解できないことが、最大の課題の一つとされています。例えばもし目の前のトーストを焦がしたとすれば、明日、焦がさないためにどうしたらいいかわかります。でも自分が持続不可能な形で生活していても、直ちにその影響を被るとは限りません。けれどもそのせいで、世界の別の場所に暮らす他の人に影響が出たり、今ではなくても10年後に影響があるかもしれないのです。サステナビリティについて教えるのは非常に難しいことです。

ここで皆さんへの質問です。

PRE—場の教育—は自分たちが住んでいる場所にどれくらい応答しているでしょう。これまで私は、PREは素晴らしいものとして語ってきました。まるで魔法の薬のように、何でも解決してくれますよと聞こえたかもしれませんが、でもこのPREにもやはり限界があります。例えば、我々が19世紀のロシア文学について学びたいとき、またはフランスの印象派の絵画について学びたいとき、パレスチナとイスラエルの紛争について知りたいとき、そしてバングラデシュにおける気候変動の影響について知りたいとき、ロシアに行くのか、バングラデシュを訪ねるのか、イスラエルとパレスチナを訪ねるのか、フランスに行くのか。答えはNOですよね。そんなことはしないと思います。相当なお金持ちであれば行くかもしれませんがけれども、それにしても、飛行機を使うのは持続可能性の原則に反しますから、そうもできません。

PREには大賛成ではありますが、しかし適応性には限度があると言いたいのです。ですから、場の教育法を実施するのに最適な機会がいつなのかをよく見極めなくてはなりません。「それを学ぶためにそこにいくことができないから、実際にPREは使えない」と言わざるを得ない時もあるのです。もちろん、実際に行けないからといって、ある場所について学ぶべきではないということではもちろんありません。教育者としては、適した教育手法を用いる判断が必要です。

2つ目の質問です。みなさん自身が実践している場の教育(PBEまたはPRE)は、どれくらい変革をもたらす、場を変えていくものになっているのでしょうか。その場の社会的な不平等を明らかにするようなものなのでしょうか？あの場に影響を与えることができる力と機会を、そこに暮らす人たちがすべてが同様に持っているのでしょうか？すべての市民が、生活を謳歌するための平等な権力と機会を持っているのでしょうか？

3つ目の質問は、私たちのPREは、参加者の経験をどれほど、遠くに在る世界の他者と結びつけているのでしょうか。彼らも流動的な生活をしています。PREに意欲を持って取り組んでいるみなさんへの良いニュースとしては、文献や参考書が増えていっているということです。もっと実践したいなら、可能ですし、そのための支援があります。しかしながら、先にお話したように、こういった時代の状況を考えるとここまでPREが難しい時代もないと思います。私自身も人生の不確定要素にたびれます。そしてその不確定要素というのは、この時代を生きる多くの人間たちにとって、かなりの負担になっています。先を見通すことがどんどん難しくなっています。「あ、わかった」と思った時には、もう変化している。自分のパソコンの使い方をマスターしたと思った瞬間、ソフトをアップグレードしなさいというメッセージが届くわけです。物事は全て変わり続けています。

自分たちの場所のためにそして場所を通して教育をする。これが今ほど重要な時はありません。最初に申しあげたとおり、私のお話からみなさんが、今からの2日間の議論を意味あるものにするために活用できる、具体的な言葉を見つけていただけると幸いです。

ご清聴どうもありがとうございました。

主たる参考文献：

Gruenewald, D. (2003). The best of both worlds: A critical pedagogy of place. *Educational researcher*, 32(3), 3-12.

Hawkins, M. (2014). Ontologies of place, creative meaning making and critical cosmopolitan education. *Curriculum Inquiry*, 44(1), 90-112.

Wattchow, B. & Brown, M. (2011). A pedagogy of place: Outdoor education for a changing world. Clayton, Australia: Monash University.

Place-based education in the 21st century

Simon Beames

The University of Edinburgh

Simon Beames is a senior lecturer in Outdoor Education at the University of Edinburgh. For 23 years, Simon has taught outdoors and indoors in North America, Asia, and Europe. Simon developed the Outdoor Journeys programme, which is a cross-curricular, local outdoor learning initiative that is being used in several countries.

Good morning. I would like to begin by thanking the organizing committee for the invitation to come over here. I'm very honored to be here to speak to you and discuss with you. I would also like to thank Takano-san and Ohmae-san for organizing all of this, and making it so easy for me to come over here. Thank you so much for this opportunity.

Here you will have a small Canadian man who lives in Scotland coming to Japan to talk about Place-based education. I certainly don't pretend to know everything about this topic, but I've done fair amount of reading, thinking and writing about it. And it's my hope that you might find one or two nuggets that you can take away from this talk and make some connections to your own work.

So, why are we doing this in the first place? Well, as Takano-san says, there has been increasing amount of discussion and writing which has been done on Place-based education, in learning outside the classroom circles, formal education, outdoor adventure education and environmental education. It's no longer uncommon for these pedagogies to be used.

However, I also say that, from what I can see, the term 'Place-based education' is becoming so big and so broad that it is starting to lose a bit of meaning. The term is becoming so big that is starting to lose its usefulness. So, what I hope I can do today is to give us more specific terms that we can use in order to have better conversations about place-based education. This will give us a language. I'm going to do that by suggesting there are three levels of place-



based education and that each one rests upon the one before.

A little background (and this is the first level) — the basics of place-based education, the second level of critical and transformative PBE, and the third level, which is new to me (I only discovered this about a year and a half ago): 'Critical cosmopolitan' place-based education. I will finish off with three things that I would like to suggest you consider for your own practice.

These photos are of some of my secondary teachers-in-training, who are studying at The University of Edinburgh. They are math teachers. Here, right outside where the university, is a busy urban environment. They are measuring the gradient, the angle of the Royal Mile, which is a very busy ancient street in Edinburgh. So, they're doing math in a place that's very local and familiar to them.

In term of the roots of Western PBE, in the 70s and 80s, much of the writing was about place in general. It was mostly from a human geography perspective and from a philosophical perspective. One of the gurus, Yi-Fu Tuan, said that "Space is unstoried place." So, place has a story, but space is regarded as empty.

Later on, from the 1990s and to the present, was when this philosophical angle started to have an educational imperative. Education was added to



conceptualizations of place in the 1990s. I was talking with Amba-san about this this morning a little bit; we're talking about why 30 years earlier PBE didn't exist. Well, our conclusion was that probably it wasn't needed. This because that kind of PBE happened through our own cultural pathways, and was handed-down from generation to generation. But it's not like that any more, is it?

At this point, I want to make an important side-note: the Japanese writing on Place and Place-based education pre-dates that in the English literature. I'm afraid that my Kanji is not up to understanding this literature, however.

Where does all of this interest in PBE come from? What's driving it? I hinted about this a moment ago: PBE wasn't needed before. The authors of the book *A pedagogy of place*, Mike Brown and Brian Wattchow from Australia, suggest that it all has to do with modernity. I'm quite interested as an amateur sociologist in this concept of modernity or what some sociologists would call "late-modernity" — or even "liquid modernity", which is my favorite. Another way of putting this is that the world is changing so quickly that our young people are losing their connections to their places. I think it is fair to assume that many of you see this in your day-to-day interactions with young people. I see a lot of people — whether it is in London, England or Shinjuku — who they are not really interested in place; they are interested in screens, and walk with their eyes glued to their phones. Right? It's the same wherever you go.

I propose that there are three levels of PBE. The first is getting to know our places. The second is transforming them for the better. And the third is sharing our stories of those places with others in faraway places — with who some people would call

"global others".

Here are some more examples from some of the teacher training that I'm involved in. This is more place-based math, and some science and history. All of this is happening within 200 meters of the school. So, it doesn't involve big expenses and organizational logistics to go hundreds of miles away to mountain regions, for example. This place-based learning is outdoors and it's deeply contextualized within local phenomena.

Let's look at some of the assumptions that I like to make about the first level of PBE. First, this is about education, and education differs from learning because there are intended learning outcomes and because there is an educator as a teacher. Second, it's about the faraway and the very local, as well as everything in between. Third, we look at the past, we look at what's going on right now, and we look at the future as well.

Fourth, place can be used as a pedagogy; it's a way of teaching and can be used to learn across the curriculum — math, science, geography, languages, history, expressive arts, and so on. Fifth, PBE considers interactions between land, ecology and humans. That all fuses together.

Dwelling is a word that is used in PBE quite a lot. Living well in our places involves dwelling in them; one has to spend time there. PBE is best when it involves spending time getting to know a place, rather than having it presented by a tour guide, like "that is a birch tree, this building was here since 1850". Effective PBE requires being in the places and getting to know them.

Let me give you an example of how we can do PBE really quickly. I do this with everyone from grade



three pupils to wilderness guides. It's a very simple framework called "Outdoor Journeys" and it features these three phases: Questioning, Researching, and Sharing.

Questioning involves walking outside. So, imagine us walking outside of the building here, outside of the beautiful doors. Then we would ask a question. So, imagine that every single person here walked outside and wrote down questions about this landscape. These might be ecological questions—something about living environment—or maybe a historical or heritage-based questions. Next, we would all come back in and post our questions on the wall. At this point, we would start the second phase: Researching the answer. We can do this through the internet, maybe asking an elder, or through printed media — old maps are very good. Once we had the answer, we would share with it everybody. Sharing is the third phase of Outdoor Journeys. At this point, we would then have all kinds of different pieces of knowledge about this particular place that have deep relevance for each learner. This approach gives the learner increased agency and the power to decide what they want to learn about. This simple framework for place-based education involves writing down questions, finding the answers through research, and sharing knowledge with others. (see www.outdoorjourneys.org.uk)

So far, we've only been discussing the first level of Place-based education. The second level involves, not just knowing a place, but something Takano-san mentioned earlier: taking action. It's not enough to know a place. We need to see what's wrong with this place, how this place can be bettered, and then take action. This has much more of a citizenship angle and political angle, and deeply examines inequalities of power and opportunity.

There are a couple of key concepts involved in this second level. The first, called decolonization (Gruenewald, 2003), is to acknowledge that everything in the past about certain place may not have come to be through very equitable terms and fairness. Just think of land use in my native Canada or in Scotland. In Canada, it was the French and the English who marginalized the indigenous people. In Scotland, it was often the English (and rich Scottish) who pushed

the Scottish peasants off the land. It is important to acknowledge these past atrocities, and while it maybe difficult for a 10 or 15 year-old to fix all of that, the first step is certainly to understand it.

The second concept, re-inhabitation (Gruenewald, 2003), is something a bit easier to comprehend. It is to consider how we can live well socially ecologically — to live more sustainably, so that the generations after us can also live well.

A link [here](#) to community-based education can be made. A lot of literature says that community-based education is a branch of place-based education.



This has a big theme on citizenship, and focuses on identifying community issues and then figuring out a way to take action. Initially, this might be done in a local organizational context, such as re-configuring the way children line-up for the food in the cafeteria — something really small. It can also involve going outside, where organizations, public buildings and outdoor places become sites for learning. Seen this way, education does not only happen in school, and community members become co-educators. It's not just about the teacher having all the knowledge, but also drawing on skilled fellow citizens from the neighborhood. Environmental conservation and community service projects are the two most of common approaches that I see. However, I think there are interesting opportunities for learning through local businesses as well. In Scotland, this is called "Enterprise education". Community-based education can also be done through cultural events and the arts, of course.

So, here we have it. This is a pretty happy picture, so far. The first level of PBE involves getting to know our places. The second level involves taking action. Good.

The PBE that I have described so far exists on a fascinating social ‘backdrop’. For example, we have very rigid and prescribed educational policies. This is the same wherever you go in the world; the curriculum is narrowing and everybody is teaching to the test. If we take this to its logical extreme, we will have students in different countries across the world, who are learning the same kinds of mathematical problems, science, equations, and languages. One problem with this, is that as the curriculum narrows, teachers are less able to make judgments. Crucially, too often this leaves education ignoring place, culture, and nature.

The other part of this social backdrop, is that we live in these crazy times, where everything is constantly changing. These ‘liquid times’ are characterized by nothing being certain and nothing remaining fixed (see Bauman, 2007). Consider our grandparents: most of them had the same jobs for their whole lives, and lived in the same house their whole lives. Ask a 10 or 15 year-old today, certainly in Canada and UK, they just don’t know what they will be doing when they grow up or where they are going to live, because it’s all changing.

All of these above challenges are happening at the same time that we are facing huge challenges as citizens of the planet. Earlier, Professor Abe was talking about Education for Sustainable Development, and how global issues of climate change are facing all of us — irrespective of what country we live in. How do we tackle this? How do we tackle the power held by massive corporations, that is changing the way people live. These corporations have changed the way the people work in factories on the other side of the world. Often, people’s living conditions are so appalling, they feel forced to migrate and so leave their families to work thousands of miles away. We see this happening in Europe and in the Middle East. We see wars that are being waged on the religious grounds. All these global phenomena are happening at the same time. It’s a particularly difficult time to be educating for place. That said, despite these

difficulties, it is absolutely vital that we do educate for and through place.

On a side note, I wanted to mention that Mike Brown from New Zealand, who co-wrote the book about A pedagogy of place, says that PBE should be “PRE” (Place Responsive Education), because the word “responsive” implies action.

Let’s now look at the third level of PRE. This level was unknown to me when I started reviewing more recent PBE literature. It is the whole business of creating citizens of the world. As noted above, we have these global issues. So, it’s not enough to be just focusing on knowing our places and changing our places. We need to be making links to the wider world. This is because actions taking place in the wider world trickle-down and affect what we do in our local contexts. This is about locating our own PBE and the action we take within a wider global narrative.

This third level of critical cosmopolitanism (see Hawkins, 2014), involves understanding local phenomena within the broader context of global influences. The latter could be capitalism or climate change, for example. Learning about how local places are influenced by far away places can be done by sharing stories. Luckily, we can do this quite easily through various different online methods, such as Skype and Wikis. People in Shinjuku can tell stories of their places to people in Nagaland, where Amba-san is from. They can share.

It’s no longer enough to know about what is going on in your place, and to try to change that place. The world needs citizens who understand what’s going on in other places, too. What I understand from Education for Sustainability literature is how one of the biggest problems surrounds young people finding it very difficult to understand the connection between their own actions and consequences. For example, if I burn my self-making toast, I know how to do things differently next time. But if I am living unsustainably, it does not necessarily affect me immediately. But it might affect the way that someone else on the other side of the world is living now or in ten years. Sustainability is a very difficult thing to teach...

Here are some questions for you, if I may be so

Take away questions...

- To what degree can (and should) our PBE genuinely respond to the place in which it happens?
- To what degree is our PBE an emancipatory, place-transforming one?
- To what degree is our PBE linking participants' local, fluid lives with those of global others?

bold to pose you some questions.

First, to what degree can PRE really respond to places we live in? So far, I've spoken about PRE as if it's some kind of fantastic thing that we all need like a magic potion. Everybody takes it and all will be well. But there are limits to the possibilities of PRE. If we want to learn about 19th century's Russian literature, about French impressionist art, about Israeli / Palestine conflicts, about the effect of climate change on people living in Bangladesh, does that mean we are going to go to Russia, France, Israel, Palestine, France and Bangladesh? No, we're probably not going to do that. Well, maybe if we had all kinds of money, then it would be possible, but then we wouldn't want to fly there because it would be against our sustainability principles.

My point here is that even though I'm a big fan of PRE, its applicability has limits. I think we need to be really clear about when is the best time for us to employ place-based pedagogies, since there may be times when we need to say "well, we can't actually do that. We can't go to that place in order to learn about it". This doesn't mean that we shouldn't learn about a place that we can't go to, of course. As educators, we must use our judgment to employ appropriate pedagogies.

The second question that I will leave you with is this: Your place-responsive education, how transformative is it really? Is it one that exposes some of the social inequalities in the area? Does everybody have the same power and opportunity to influence their place? Do all citizens have the same power and opportunity to live a flourishing life?

The third question is, To what extent is our place-responsive education linking our participants'

experiences with those in faraway places — those global others? These people are living very fluid lives as well.

The good news is that, for those of you who are really keen on PRE, there's increasing literature and guidelines available. If you want to do more of this, you can do it, you can find support. However, PRE has never been so challenging because of these crazy times we live in. I get stressed-out by all uncertainty that is in my own life. This uncertainty is highly challenging for many humans in this age, since our lives are less and less predictable. As soon as we think, "I understand this, I get it", it has moved somewhere else. Just when I think I have my computer figured-out, I get a flashing message telling me that I need to update my software. Everything keeps changing.

Teaching for our places, and through our places, has never been so important. As I said with my opening remarks, my hope is that you now have a more specific PRE language and terminology that you can use to have really meaningful discussions over the next two days. We need to have some specific terms so that we can have more meaningful deeper discussions. I wish you all good discussions for the next couple of days. I thank you very much for listening.

Principal references

Gruenewald, D. (2003). The best of both worlds: A critical pedagogy of place. *Educational researcher*, 32(3), 3-12.

Hawkins, M. (2014). Ontologies of place, creative meaning making and critical cosmopolitan education. *Curriculum Inquiry*, 44(1), 90-112.

Wattchow, B. & Brown, M. (2011). A pedagogy of place: Outdoor education for a changing world. Clayton, Australia: Monash University.

基調講演

伝統的な学びの中での「場の教育」

インド アンバ・ジャミールさん

インド北東部のナガランド州の少数民族アオ族。「Sustainable Development for Nagaland (ナガランドの持続可能な開発)」の代表。環境に関する弁護士資格を持ち、山岳地での農業、資源管理、人材開発など、少数民族が暮らす地域社会を中心に、持続可能な社会を目指した幅広い教育活動を展開している。



ここがもし自分の国だったら、こう挨拶をします。
「センソ、タジュンゲテム、ジュンガ、リル、スディ」。

これはナガ族の中のアオという人々の言葉で、「みなさん、元気ですか」という意味です。

でも今は日本にいて、インド、特にナガランド州での実際の経験を発表します。ナガランドがどういうところかも後ほど詳しく説明します。

先ほどサイモンさんは、とてもいい発表してくださいました。基本的な考え方に関して、深く同意します。今回の件で、エコプラスと早稲田大学にお招きいただきありがとうございます。

私の発表は、より具体的なお話になっていくと思います。現場での話をしていきます。

私は、ナガランドのアオ族の出身です。私の今着ているジャケットをご覧ください。伝統的に男性が身にまとってきた大きなショールを模したデザインです。優れた戦士の物語を表しています。私どもは基本的には農業で暮らしています。経済の80%は林業と農業です。日々の暮らしは自然と深く結びついています。とても素朴な生活ですが、社会の変化とともにだんだん複雑になってきています。進歩なのかどうかよく分かりませんが、複雑にややこしくなっています。

私たちの農機具はとても原始的なものです。竹とかアシとかをととてもよく使っています。農業も雨に頼ってい

すべてが土地に根ざす暮らし

これは、私の出身地のインドです。地図をよく見ていただくと、この北東部に8つの州があります。この8州の境界線の97%は国境で、他の国に囲まれています。ニューデリーから自宅に戻るには、飛行機はネパールとブータンとバングラデシュを超えなければなりません。狭くなったとても狭い場所だけを通じてインド全体とつ



ながっています。「ニワトリの首」と呼ばれています。

Simple life-ways and practices



ます。水を引き込んでの水やりとか化学物資の投入もしません。歌とか踊り、祭りが大好きです。すべての学びの軸はすべてそこから生まれ、それがすべての基盤になっています。

私たちの食べ物は、それ自身が自らの文化に感謝し、自分たちの資源とその生態系を学ぶ素材となっています。「自分たちが何者でありどういう場所で生きているのかが、私たちのすべての学びの出発点だ」と私は思います。サイモンさんがさきほどよく説明してくれた通りで、私たちのすべての行為は土地に根差しています。星も月も太陽も、すべてのものは土地とつながっています。

私たちが信じる精霊たちもすべて土地とつながっています。場所も、そして宇宙も、すべては歴史につながっています。説明しがたいこの宇宙も私たちにとっては学びが描かれる舞台となっています。それぞれの家族、親族一同、部族全体、近隣住民、同世代の仲間たち、村人全体が一体となってこの学びを提供するのです。全体としての大切な原理原則というものが、学びの過程そのものとなっているのです。

何が Formal な教育なのか

ナガ族の視点で見た場の教育（PBE）とは何かを、みなさんと一緒に考えていきたいと思います。学習の目的というのは、どのように（How）という手法に力点が置かれていて、なぜ（Why）の部分があまり省みられていません。過去と現在の学習体系を統合していくことも大きな課題であり、同時に大きなチャンスだと思います。同時に、公的な（Formal）教育という言葉を使うべきかどうか迷っています。この用語を使うことで、伝統的な学びを排除し、それに対する予断を持ってしまっているように感じるからです。こんにち、Formal と呼ばれる教育は、ほかの人々にとっては Non-formal なものであり、私たちには Non-formal と呼ばれるものこそが Formal であるのです。

Formal な教室での教育が始まる前まで私たちがやっていた、そしていまでも続く口伝えの学びのプロセスは、まさに私たちにとっての Formal な教育なのです。カリキュラムや学年を超越した学びです。後ほど2つの事例を紹介します。その上で私からは何の結論づけもしない状態で、みなさんとの意見交換をしたいと思います。

学びというのは、本来地域に根差したものなのです。私たちみんなが知っていたことで、わざわざそう語られてもこなかったことです。しかし、現在の世界において教育は、もっと直接的なものとなり、往々にして人任せにされてしまったのです。私たちは学校や大学に子どもの教育の多くを期待し過ぎています。親や隣人やきょうだいや祖父母たち、さらには見も知らぬ人ですら果た

していた、人々が学び成長することを教える役割とは何だったのでしょうか。学びの機会を提供する場として、学校だけを見るのではなく、地域全体を見る必要があるのです。こう理解出来ると、教室の中だけでなく、どこにいても心を解き放つことが学びになっていきます。

野原に出て行く時、祖父母が何かをしている時、疑問に思ったことを尋ねる時、何にでも興味を持つ時、そういう学びの機会をつかみ取ることが PBE を育んでいくのです。こんにち、私たちは公的な教育をえることが出来るというありがたい状況にあります。さらには学びを豊かにしてくれるテクノロジーも使うことが出来ます。その時に、「なぜ（Why）」という学びの側面に着目する必要があります。すでにみなさんも納得しておられるように、学ぶということは単に知識を得るということではなく、自分がどうよりよい人間になることが出来るか、仲間たちにとって価値ある存在になるにはどうすればいいか、得た知識で自分は何ができるか、を追求することなのです。

私たちの社会では、こういういい方をします。「彼は知っているけれど、分かっていない」「彼はいい人けど役に立たない」「彼は素晴らしいけれど、残念ながら社会的な価値はない」。

いま社会は進歩しているという時に、それが単に教育を受けることが出来る、より高度な学校に進むことが出来る、あるいは年々より多くの情報を得ることが出来ることを示してはいないか。それが問われています。こういう教育を受けることで社会にとって価値のある人になっていないのではないか。我々の文化や伝統の中で、使い物にならない人間になってはいないか。実際に職を得ることが出来るかどうか分らない工業化社会に飛び込んでいく準備をさせて、自分たちの社会に適應できない人物を作り出してはいないか。現代の教育の仕組みが、私たちの文化的、社会的、経済的な流れの中で子どもたちが成長するのを支えることなく、単に外に流れ出していくだけになっていないか。そんな教育は私たちの社会に価値を持つのか？公的教育システムが失っているものが何なのか。それが私たちの直面する課題です。いったい、どのような学びが必要なのでしょう。

何を育むのか

学びの中で、無数の本があり、研究結果があり、新しい知識や情報がたやすく得られる今日、私たちが学びというものの中で、往々にして忘れてしまうのは、若い心の中に育みたい文化的な価値や倫理といったものではないでしょうか。その価値が基礎となって知識をかしこく使うことができるようになるのです。残念なことに、私は近代的な教育を受けるようになったわずか2世代目

Learning and living @ landscapes levels



の人間ですが、すでにもととの伝統から離れてしまい、価値観は悪い方向に影響を受けています。これが進歩なのかどうか。もう一度考えるべきことだと思います。

伝統的な手法や知識、技に基づいて教育をするということは、大きなチャンスであり、教育の空間として重要です。これを科学的で研究的な視点を含む広い視野で見えていなくてはなりません。伝統知というものは、正式な科学によって評価する必要があるという人もいでしょう。こういう対立的な議論をするのではなく、双方の価値を認めることが必要なのだと思います。

例えば、地域の伝統的な医者がいって、この薬草は、朝のうちに南側の斜面で取ってきた場合には、胃の調子をよくしてくれる。でも西向きの斜面から取ってきたらそれは効かない。逆に動脈の動きをよくするように働くと言われたとします。これを科学的にどう説明したらいいのでしょうか。現代科学の主流では、植物が持っている成分だけを見ます。でもそれが取れた斜面が北向きなのか南向きなのかなど気にはしません。

私は近代科学が無効だといっているのではありません。ただ、精神性とかより良く生きる (Well-Being) とかいうときには、科学には限界があるということです。地域に立脚し、自らが暮らしている社会的物理的な環境の中で学習者と関わり合うこと、それが場に根差した学びを発展させるのだと思います。

伝統社会に潜む叡知

私たちの社会での伝統的な焼き畑農業の一例を紹介しましょう。

あまりご存知ないかも知れません。まず森の一部を切り払い焼き払って、そこで2年間作物を作り、その後は自然に戻すという古くからの手法です。私の村では17年周期で耕作場所を移して行きます。17年間休ませて2年作物を作るという訳です。残念なことに、焼き畑農法をしている村人たちは、自分たちが原始的で非生産的で破壊的ですからあると思っています。これは政府の方針が、こういった土地の使い方を悪いものだとしているからです。小さな子どもは気にしませんが、若者た

ちの多くは「原始的で非生産的で破壊的だ」とされる仕組みと一緒にするのは恥ずかしいことだと感じ、焼き畑に関わりようとはしません。

しかし、こういった伝統的な農家が持っている知識には驚くべきものがあります。星や月を見て、どの種をどこにどんな風に植え、何をどの日のどの時間帯に、時には夜に収穫するということを決めます。季節もみていて、その年に雨が少なくなりそうとか、そうではないかというような予測もします。その上で、どの種類の稲を作るかを決めるのです。こういう多品目を同じ場所で栽培する農業の中で、それに対応する多様な稲の品種を持続しているのです。役に立つ働きをする昆虫を呼び寄せる植物も植えます。害虫を食べてくれる天敵昆虫を使うのです。彼らは、農生物科学者でもあり、土壌科学者でもあり、天候予測者でもあるのです。原始的農民と呼ばれる人々がこういう知識を持っているのです。この知恵を学び、その働きを知るということが重要なのです。

伝統知というのは間違いなくいいことです。ただ美化してはいけません。素晴らしい取り組みはたくさんあるでしょうが、持続可能ではないやり方、やめた方がいいこともあるはずで

残念なのは、新しい世界からの手法が持ち込まれる中で、多くの価値や手法を失いつつあることです。わずか2世代目でしかない私たちですら、田舎での暮らし方から都市での暮らし方に移り、村のコミュニティからも離れつつあります。すでに日本が通ってきた過程かもしれませんが、年寄りと若者の世代間ギャップは大きくなり、知識を共有するための世代間コミュニケーションも大きな課題になっています。文化的な価値や伝統的な誇りや技といったものは、もはや消滅寸前といった状態です。サイモンさんがいう、この市場経済と消費主義 (Consumerism)、そして土地から離れた生活様式といったものが我々のこれまでの持続可能な暮らし方に取って代わるようとしています。とりわけ消費主義については、それが富の分配を誤らせるだけでなく、私たちの暮らし方も含めた大切な自然の破壊へとつながるのではないかと危惧しています。

こうやって見てくると、私たちの社会が直面する課題は、内部的な変化ではなく、外部からの力や変化によって引き起こされていることが分ります。「これまでの経験や叡知と引き換えに、新しい知恵を追い求めているのだろうか」「ほかの人々がやっていることにそのまま従って、それまで知っていたり持っていたりしたものを失っているのだろうか」という大きな疑問がわき上がります。

Formal と Non formal な知の体系の双方をうまく組み合わせることが重要で、私たちはコミュニティとして次世代を育てるにあたって双方の最善の部分を使うこと



が必要なのだと思います。

重要なのはこういったことは小学校レベルから実践されるべきだということです。子供たちは進学するにつれ、村を離れ都市へと出て行きます。一度その動きが始まると、村の暮らしに戻るのは困難になります。彼らの教育は農業や村での取り組みからは離れた世界に向けた教育を受けていくのです。若いうちに地域の価値にひたり、歴史や伝統やコミュニティーへの貢献というものを理解出来るように手助けすることが、その場所やその文化に根差した学びの一番の基盤なのだと思います。

連帯責任と共有資源づくり

学校の中だけでなく、日々の実際の行動や関わり合いの中で学びが重なっていくためにはどのようにすればいいのでしょうか。私たちは地域の公園を使って、テントを立て、野菜やコメを持ち寄り食事をするというようなことをします。この共同作業で料理するだけでなく、食べられる植物を集め、みんなと分け合い、集団で行動することを学びます。公教育が地域資源の上に組み立てられていれば、子どもたちの発達のみならず、伝統的な学びの過程では得られない、他の文化やテーマについて読んだり書いたりして学ぶことにも寄与することができるのです。

コミュニティーの中でどういった人が学びに関われるかと考えると、高齢者であったり、教育を受けた人々で

The “Place within Community”



あったり、技を持つ人であったりすると思います。そして私たちには、川とか森とか自然の生態系とかいう場があり、そこでは、自然を自然として学ぶことができます。地域が生み出してきたもの、伝統的な場所であったり、物理的な財産であったり、社会的な仕組みであったりするものが、学びのための理想的な「場」を構成するのです。自然のある状態や地域の祭、若者のイベント、そして教室でのものごとの展開を通して、どのように学びを組み立て生きて行く技を伝えるのかという責任が、教育者としてあるいは年長者として求められるのです。

集落再発見プロジェクト

この集落再発見のイベントは、私の出身地であるモブングチュケット村落で何年も前からやっています。村人は過去 40 年間、教育を受け、どんどんと都市部に引っ越していきました。政府機関で働いたり、専門的な技術を得たりしてナガランド州のあちこちに住むようになりました。その子供たちは、村とは違う別の場所で生まれ育っています。この子どもたちは村についてほとんど、あるいはまったく何も知らないでいます。数人の親戚を除けば、両親が生まれ育った村とは何の関係もない状態になっているのです。

この自分たちの村を「発見」し、文化的心情的なつながりを生み出すために、村の長老たちは、ナガランド州の州都であるコヒマに住む親たちに、その子どもたちを村でのプログラムに送ってくれと呼びかけたのです。安全にしっかりと学びが出来るように集落が責任を持つと伝えました。びっくりするほどの反応で、若者たちがやってくると長老たちが面倒をしっかりとみました。男の子たちは男の年寄りたちが、女の子は女の年寄りたちが面倒をみました。村の中だけでなく、関係する場所や集落の文化的な施設などに連れて行きました。文化や信仰や技、

Village Rediscovery Excursions



歌、さらにほかの技について語り教えました。その上で古代からの交易路にそったハイキングをして、歴史をたどる実体験をしました。その途中の別の村の若者たちとも交流しました。これを通じて若者だけでなく高齢者も学びを深め、若者たちは何も知らなかった自分の村を身近に感じるようになったのです。

こういう過程が、阿部さんがいう持続可能な社会づくりにつながっていくのだと思います。この活動では、自然の場所を活用して、学びを触発させているのです。関係づくり、つながりの触発、考えの共有、そして経験を重ね、さらに歴史や文化、他者とのやりとり、技、社会的なつながりの醸成などに広がります。

地域を軸に、地域が動かす

政策というのは、いつも政府が生み出すという訳では

ありません。

地域が決めたことが地域の政策になっていきます。ある政策が私たちのために機能しないと文句をいうだけではだめなのです。地域こそ現場であり、そこで政策を組み立て、工夫をし、実施していくのです。自分たちがやっていることがコミュニティの価値、コミュニティの幸せに本当にふさわしいかを考えます。コミュニティからただ知識を引き出すためのものではなく、その知識を超えて、本当の幸せにつなげていくのです。状況を理解し、どのような可能性があるかを考えて行動しなければなりません。

地域保全区域という試みもあります。保全する区域を最初に作り、自然保護についてのグループ討論を始めました。そこからちょっと進めて、地域に根差したツーリズムという世界を考えました。コミュニティでお祭りを企画したのです。政府からは何のサポートも受けていません。伝統的なスポーツや技能や工芸を祝う祭です。

地域の農業学校というものも始めました。農業者たちが共同で取り組んでいて、だれにでも農地に来てもらえるようにしたのです。子どもたちでも別の村の農業者でも歓迎です。自分たちの知識と技を見てもらい交流するための舞台です。

最後のスライドです。学校の教師たちは集落再発見プロジェクトでは、共同主催者というだけでなく、学習者であったとも言えます。学校の若い教師たちの多くは、村で生まれ育ったわけではありません。その教師たちにはプロジェクトはいい学びの場だったのです。反対に、生徒や若者たちのグループは学習者というだけでなく、

How convergence worked...

- School teachers involved as co-learners;
- Student and youth organizations involved as collaborators;
- Parents and community institutions fully engaged;
- Formal institutions actively participating in village led activities (NSS);
- Extension services to colleges and universities;
- Funding – no longer an issue



学びのプロセスの共同企画者でもありました。親たちや村の各組織は金銭面も含めてそれを支えました。地域が本気で何かをやるという時に、財政は大きな問題ではなかったのです。

ジャケットのデザイン

この服自体は、最近作られたものです。この上着のデザインや色具合は、伝統的な戦士が着る肩掛けのものです。戦う男性の衣装です。

この模様は、ある戦士の優秀さを語っていて、伝統的な信仰や崇拜の形を示しています。月と星は未知の空間を象徴しています。同時に私たちの命や活動などという全ての物事の巡りを示しています。サイチョウ（Hornbill）という鳥は特別視されている存在で、その羽根を頭飾りに使います。

頭飾りは竹で出来た冠のような形のもので、クロクマやイノシシの毛皮で覆われています。イノシシの牙も飾りに使われます。腕輪には、象牙が使われます。象牙が規制されている現在では、象牙風のプラスチックが使われています。環境保護や野生動物保護ということでは良くないのかも知れませんが、こちらはトラとクマのツメです。これが熊の皮です。こちら盾です。盾はバイソンの非常に硬い皮を乾かしたものです。ゾウの皮や、竹とアシを使う人もいます。

サイチョウは私たちがあがめている鳥です。男はすべてサイチョウのようにあるべきだと言われます。誠実で、恐れを知らず家族を守る鳥です。メスが卵を温める時には、大きくて高い木の幹に穴を開けて中に巣を作ります。卵がかえるまでずっと中にいます。オスは出入り口の穴を泥でふさぎ、敵から身を守ります。オスは毎日狩りに行って、小さな穴からメスにエサを与えます。ヒナがかえるまで続けます。技を持って尽くす美しい鳥、それがサイチョウです。

そして雄鶏がいます。戦士は雄鶏のようにあるべきだとも言われます。必要であれば死ぬまで戦うからなのでしょう。同じように、トラもライオンもジャングルの王者です。彼らは必要なだけ食べ、不必要な殺戮はしません。

これらがここに描かれています。染色には、さまざまな植物や葉っぱが使われます。頭に飾る黄色のものは、干したランの花。長い毛は山のヒツジ、もしくは人の毛です。海で取れるコヤスガイも使われます。女性用の伝統衣装には特によく使われます。昔は海ともつながっていたのでしょう。ヒマラヤ山脈は造山活動で隆起した海でもあります。

私たちは星や月やほかの自然の霊的な存在を信じてきました。いくつかのデザインは入れ墨に使われるものです。胸や足にいれずみをして、どこの部族のどの位に属するか、どれだけの首を狩ったのかなどを示したといわれています。



Place-Based Learning in Traditional Learning Processes

Amba Jamir –Nagaland, India

Amba Jamir is a development consulting expert with over 15 years of multidisciplinary experience from policy formulation to project development, Amba is professionally trained as an environmental lawyer and development communicator. He is an acclaimed grassroots trainer, facilitator and community leader with experience in the Asia Pacific region in the areas of education, development, livelihood, and policy advocacy.

India - That's where I come from and if you look at the map of India, I am from the northeastern region. The Northeastern region consists of eight states and 97% of our boundary is international border. If I have to travel from Delhi to my home in Nagaland, I have to fly across Nepal, Bhutan, and Bangladesh to get there. This little portion is the only link of the land that connects us to the rest of India. We call that the chicken neck because it is just a small and thin strip of land.

Within the Northeast I come from Nagaland and I'm from the Ao tribe. As you can see, my jacket is little take away from the larger shawl that we men folk wear. The motifs narrate the story of the good qualities of a warrior. Basically our people are land-based agriculturists and 80% of our entire economy is based on forestry and agriculture. We still live a life that is continuously connected with nature. We live simple lives but it is getting complicated as we progress. I don't know if that is progression, but it's getting more complex and complicated. Our tools and farming equipment are still pretty rudimentary and we use lots of use of bamboo and cane. The entire agricultural system is rain-fed which means no irrigation and no external inputs of chemicals. We love our songs, dances and festivals. The whole principle of learning emerges from there and that's where everything is based upon.

Food in itself is a great way to appreciate one's culture and to learn about the resource-base and the entire life around it. Now, if you look at when I say



“our entire learning system is based upon where we come from and where we live,” and as Simon has very elaborately explained, everything we do is land-based. Everything we believe in, except for the stars and the moon and the sun, is land-based. The spirits that we worshipped or adored are all land-based. Therefore, no place for us and even the space which, as Simone has explained is without history. The space - which is unexplainable - also in many ways becomes our canvas for learning. The faculty who facilitate that learning begins from individual family, the extended family, your clan, your neighborhood, your peer groups and village as a whole. Therefore the whole process of collective learning is the entire principle behind it.

In terms of how I would like to take the story is basically to explore together the paradigm of place-based learning from the Naga- perspective. Why is it that the purpose, a big deal of the purpose of learning is based on the “how” and not just on the “why” part? The challenge, as well as, the opportunity is the possibility of integrating the past and current learning systems. I don't know whether I should use the word “formal” and “non-formal,” because that seems very externally and very judgmental on the traditional system of learning. What may be formal today may be non-formal for some. For us that non-formal is our formal. You know what I mean? Until formal classroom education came, what we have been doing – the oral learning process - is for us, our formal education and that continues even today. This learning system was beyond curriculums and grades. I will try and bring together two case studies later in the presentation and of course we can then proceed to the Q and A

sessions without any conclusions from my end.

Learning as we all know - but may not be told - is and has been a community-based process. Unfortunately in today's world, learning has become too straight jacketed and often outsourced. We expect too much on schools and colleges to teach our children. What about the role of parents and neighbors; and brothers and sisters; and grandfathers and grandmothers; or even strangers to teach people to learn and grow? We must look upon the community itself - and not just the schools - as spaces and places with opportunities of learning. If this is understood, learning will not just be about opening up our minds only in the classrooms but opening up your minds whenever we are in public or common spaces. Seizing learning opportunities - when we go to the fields or when we see a grandmother or grandfather doing something, asking questions, being inquisitive - is what facilitates place based learning. While we do now have the wonderful opportunity of having access to the formal learning systems or access to technology which further facilitates learning; we have to focus on the 'why' aspect of learning. I think as we would all agree, learning is not just about being knowledgeable, but generally is about how do I become a good person; how do I become a person of value to my people; or what do I do with the knowledge I have incurred.

Culturally, we have this saying that "he knows, but he doesn't understand" or "he's good, but he cannot contribute" or "he's wonderful, but unfortunately of no value to society." The challenge for us is that today, in our society when we say we are progressing, it might simply refer to people getting educated or getting higher grades, or accessing more information and progressing year by year. What might be important for us to reflect upon is, are they in the process, becoming less valuable to our society? Are they of less use within in our own cultural space or context? Are we making them misfits for our own society by rather preparing them to go out into an industrial world where we don't know if they will get a job or not? If the modern education system has not prepared or facilitated our children to progress within our own cultural, social or economic context but rather to migrate out; what value is it to our society? Such are the challenges we are faced with today in terms of what is the formal education system missing? What is

this learning?

On the issue of progress or processes of learning, while there may be numerous books, research findings and new knowledge and information is easily available; what we often forget to question in the learning process is what are the cultural values and ethics that are being ingrained in the young minds? Values are the foundations that help one make wise use of the knowledge and education one gets. Unfortunately, in my own society, although I am just a second generation educated person, as we move away from our roots, our values seem to be negatively affected. Is that progress? This is something that really needs to be looked about.

Building upon traditional know-how, knowledge, and practices is another opportunity or space for learning and needs to be really reviewed from all perspectives including from the formal scientific and research perspectives. While some may say that traditional knowledge needs to be first evaluated by formal science; others argue that why does it need to be validated by formal science? Rather than getting into such debates, it is important to recognize and acknowledge the value of both knowledge systems for both have their values. For example, in terms of medicinal uses, how would one explain when a traditional healer says, "This plant is good for your stomach trouble so long as you pick it up in the morning from the southern side of the hill. If you pick it up later in the day and the plant is from the northern side, or the western side, then it won't work so well. In fact it's better for your arteries." How do you explain that? In mainstream science, one might just look at the properties of the plant but without having considered the aspects of the northern or southern sides.

I'm not saying it is impossible for modern science but modern science sometimes do seem to have limitations when it comes to issues of spirituality or concepts of well-being. The importance of building upon from within the community and engaging with learners in the social and physical environment that they grow up in is what facilitates place based learning.

Let me take the example of a traditional shifting cultivation farmer in my society. We are shifting

cultivators and I wonder how many of you know what shifting cultivation is. It is an ancient form of land use where the community clears a portion of the forest, burns and farms for two years before leaving it to fallow. In my village, the fallow cycle is currently 17 years. This means we farm on the same plot only after 17 years. Unfortunately, shifting cultivation farmers have been made to think that they are primitive, unproductive, and destructive. This is because of government policies which has negatively labeling such land uses as bad. While little children may not realize, many of our young people now don't feel like to be associated with shifting cultivation because they feel shy to be associated to a system that is considered "primitive, unproductive and destructive".

However, if one were to consider such a traditional farmer, the knowledge that he or she has is amazing. To begin with, the farmer reads the phases of stars and the moon and decides when and how to plant which seeds and what to harvest on particular days or nights. They consider the seasons observe it and forecast if a year is going to get lesser rain or not. This way they decide, for example, which rice variety to plant. Given that such farmers practice mixed cropping, they have a choice of rice varieties to choose from. They also have a wide range of other crops to grow along with the rice. The farmers also plant in such a way so that it attracts beneficial insects, as well as, predator insects against pests and therefore are expert agro-biodiversity managers, soil scientists and weather forecasters. Such is the knowledge within these so called "primitive farmers" and it is important that if we try to understand and recognize their knowledge and the processes of what they do.

Traditional knowledge no doubt is good but we must not romanticize it. There may be lots of good practices, but there also are practices that are not sustainable and these must be discarded. What is unfortunate is that in the process of change or adaptation to the new world systems, we are losing a lot of the good values and practices. As I said, even people like me - 2nd generation educated - are slowly shifting away from a rural to urban lifestyles and even away from the institutions and village communities. In the process - which I don't need to explain for I'm sure Japan has already gone through

it—the gap between the younger generation and the older generations are increasing by the day and inter-generational communication of knowledge sharing has become a big challenge. As a society, we are on the brink of losing cultural values and traditional pride and practices. This point I think reinforces what Simon said about the market economy, consumerism and alienation from land practices that rapidly overtakes sustainable lifestyles. Market based consumerism has really begun to start eating into our traditional systems. The issue of consumerism has made us feel concerned, because it has not only led us into problems of poor management of wealth but also led to pollution of the pristine countryside but also our practices.

When you look at all that, the challenge that our communities are facing now is beyond just internal changes but driven a lot by external forces and factors. The large question being: "Are we seeking new knowledge at the cost of the experience and good wisdom that we have had? or Are we in the process also losing what we already knew and had by just blindly following what others are doing?"Therefore, while understanding that it is important to plan for both formal and non-formal knowledge systems, we as a community must use the best of both worlds for educating the future generation.

It is important - from our perspective - that such realization begins from the primary school levels. As children grow up in search of higher education, they usually move away from the village to more urban locations. Once they move on, it is difficult for them to get on with life back in the village and more so because the education they have got has prepared them for non agricultural or rural based activities. To instill values when they are young and to help them realize the history, traditions and contributions of the community even as farmers is not only important but the very basis of place or culture based education.

Collective responsibility and building of common property resources: How do we ensure that learning takes place in everyday activities and interactions without having to think that it should only happen in schools? As children, we used our neighbors gardens to set up make believe tents, get vegetables and rice from different homes and cook our small meals. In

the process we learn to cook, to gather and harvest plants, to share, understand collective responsibility, amongst others. So long as the formal schools build upon the social good and capital of the community, they contribute a lot in not just developing the children but to also read and write and to learn of other cultures and subjects which are usually not covered in the traditional learning processes.

If we look at who are the types of people in the community that can contribute, it is usually the elders, the educated, and the skilled. Then we have the 'place' in terms of forest and rivers and natural ecosystems and resources which teach us understand nature in its natural way. The other resources are often community created or designed and each of these – be it heritage sites, our physical assets or social institutions - provide ideal 'spaces' for learning. As an educator or elder that is responsible to facilitate learning, the responsibility is in terms of how does one facilitate learning and impart life skills as a process in the natural environment or during festivals, youth gatherings or even classrooms.

The Village Discovery Excursion: The village re-discovery excursions are something my village – Mopungchuket - did many years ago. Many people from my village have over the last 40 years got educated and moved on to other urban centers. Some work in the government, some work in other professional jobs and other have settled in different towns across Nagaland. The children of such people are born and brought up in environments that are different or away from the village. Such children often have little or no idea about the village or life there as it is. This also means there is often no real connection - except for some relatives - to the village their parents came from.

In order to facilitate a process of discovering their village and to establish emotional and cultural bonds, the village elders contacted the parents living in Kohima (capital of Nagaland) with the request that they send their children to the village for a programme. The community assured all support and care to ensure not just the safety of the youth but also their learning and to host the young visitors. The response was overwhelming and once the young people arrived in the village, elders took over. The men were taken care of by the elder men and the girls by elder ladies. They

young people were taken around not just the village but across different fields and cultural domains of the community, they were given talks on our traditional systems, beliefs, practices and even taught songs and other skills. On another such trip, the young people trekked on ancient trade routes thus reliving history and experiencing it as they learn. During the process of the treks, the youth also engaged with the youth from other villages along the way. The experience not just educated the youth but also the elders and it brought each one of them closer to the village they belong to but never knew.

Such processes, I believe, lays the basis for the idea of building a sustainable society, which Abe-sensei talked about in his opening remarks. The activity, by utilizing the natural place based its education to ignite the human aspect of education where it not just facilitated building relations, initiated engagements and sharing of ideas and experiences but taught history, culture, diplomacy, skills, all of which greatly enhanced social cohesion.

Very quickly, last 2 slides. Community-centered and driven: Policy is not always something that government makes. At the end of the day, what the community decides becomes the community's policy. Therefore we cannot just say, that the policy doesn't work for us. Communities do have the space and to work within any policy and to innovate and adapt along. Issues of how relevant, what we are doing in terms of community values and community well-being. It's not just using the community as a sponge for extracting knowledge from them, but ensuring that we go beyond the knowledge and into the well-being part. We need to build upon what is and can be; and understand what the situation is. Seeing what can be done and how we can go forward. For example, we have the Community Conserved Areas, which the community has started and later on, we made the conservation group discussions, we can discuss a little bit more about that. Community Based Tourism where the community themselves started organizing tourism festivals and tourism activities without any support from the government, in the process, rejuvenating the entire traditional sports, arts and crafts. Community-based Farm Schools, where farmers get together and say that "you're free to visit our farm where we can teach you and not only children but even farmers from other villages do come sometimes to learn and share

experiences.

And finally, school teachers during the village discovery excursion were not just co-facilitators, but in many cases learners. Given that many of the younger teachers had not lived or grown up in the village, it was a great learning experience for the teachers too. Students and youth organizations who were not only considered as learners but as partners in planning the learning process. Parents and community institutions were fully involved in terms of how to engage and how to support - even financially. Funding therefore was not an issue - if the community wants to do something. You don't really need to look for money unless it's something very elaborate.

That's the end of my story. Thank you very much.

About the jacket:

This is just the modern innovation. Traditionally we don't use jackets. If I wasn't in my western dress, I would have been freezing to death here because traditionally we do not wear pants but just a small loin-cloth in the front. The motifs and colours of the jacket is basically from the designs of our warrior's shawl. The shawl is specially woven for warriors and is a men's shawl.

The motifs that you see on the jacket generally depict the qualities of a warrior and also highlight certain aspects of ancient faith and belief. The stars and the moon represent the unknown space but which governs our life and activities in terms of a cycle of events – even in the agricultural fields. The hornbill is a much valued bird and we proudly wear its feathers on our headgears.

The headgear is a band like crown framed by bamboo and covered with black bear or boar fur. The men's chocker is made up of the tusks of the wild boar while the armband or amulet are cut from the tusks of the elephant. Of course, now days, we use wood or synthetic fibre glass materials made to look just like ivory.

Well, I know it's not so environmentally and wildlife-conservation friendly if I show everything, but these are traditional costumes. These are tiger and bear claws, these ones here. The nail and the claw's part. And so many other things and this is usually bear skin, the skin of bear. The shield is usually from the dried skin of the wild bison, elephant skin or even

made of bamboo and cane.

Hornbill is very revered by us. It is the bird that each male should aspire to be like. The male hornbill is known to be faithful, protective, and loyal to the family. When the female hornbill lays her eggs, it makes its nest inside the hollow of very tall tree trunks. The female enters the nest in the hole and stays inside with the eggs until they hatch and the chicks are big enough to come out and fly. Once the female enters the nest to lay her eggs, the male covers the whole hole with mud and protects it for the entire period of roosting. The male goes every day to hunt and come back with food to feed the female bird and later on even the new born chicks. Every time the bird comes or leaves, it will do so with utmost care so that other predators cannot make out where the nest is. Such is the devotion, skills and beauty of the hornbill bird.

Then we have the rooster or cock. We say that warriors need to be brave and determined like a rooster. If need be, cocks are known to fight till death and are very strong and agile on its feet. Likewise, the tiger, or lion are proud kings of the jungle that are never greedy and often contented with what they have or need. They don't eat more than what they should eat nor do they kill unnecessarily.

These are just some indicative examples. Traditionally, all these colours would have been naturally dyed from different plants and leaves. The yellow colour in head wears are usually dried orchids, while the long hair may be that of mountain goat or even human hair. These are cowry shells which are usually got from the ocean and seas. Our traditional costumes have a lot of this, especially for women. Probably once upon a time, we either came across some seas or, may be, I don't know. The Himalayas as we all know was part of the great sea before it was formed into the gigantic mountains. People have different theories; I don't know what it is.

We worshipped the star, moon and other natural and spiritual beings before Christianity came to our land. Some of the pictures here are the tattoo signs. Traditionally, we would have been tattooed, we have tattoos on our chests and legs, which identifies one's clans, position and in some tribes how many heads hunted.

ふるさと再発見

日本各地の、風土、地域に根ざした学び

東京工業大学大学院教授 桑子敏雄さん

社会理工学研究科。専門は哲学、倫理学、合意形成学、プロジェクトマネジメント論。『風景の中の環境哲学』（東京大学出版会、2005）、『空間の履歴』（東信堂、2009）、『生命と風景の哲学』（岩波書店、2013）『社会的合意形成のプロジェクトマネジメント』（コロナ社、2016年）など。



Place Based Education、PBE、という言葉はなかなか覚えられないのですが、私が今までやってきたこととかなりの共通性があるのではないかと思います。今日午前中のサイモンさんアンバさんのお話にも非常に共感するところがありました。

わたしは教育のことを研究しているわけではなくて、哲学からスタートして20世紀の間は哲学の研究をしていました。転機が訪れたのは2000年のことで、前年に出した「環境の哲学」という本を読んだ行政関係者から、あなたの考えを行政に反映させたいので、政策提言とかアドバイスをしたいという依頼があったのです。それ以来、単にアドバイスや政策提言だけではなく、具体的な問題が生じている現場で、一緒に考えながら、問題解決をしていくという活動を続ける中で、環境に関する配慮と並んで、合意形成にも関わるようになりました。

現場での合意形成

20世紀は環境をめぐる厳しい対立があちこちで起きました。そういうことを踏まえて旧建設省、今の国土交通省は1997年に川に関する法律を改正し、環境への配慮と住民意見の反映という2項目を新しい柱として組み込みました。その環境への配慮という部分で、わたしの本の内容に興味を持ってくださったわけです。もうひとつの大きなテーマである住民意見の反映、つまり合意形成はどうするのかということについては、社会的なニーズとしては認識されているということでしたが、「それだけ大事な問題なので、どなたか研究されている方がいらっしゃるのではないですか？」と聞きましたところ、いらっしゃらないということでした。それでこの分野でがんばれば何か成果をあげられるのではないかと思います。それからいろいろ勉強をしながら、実際に国交省、環境省、農水省等からの依頼を受けて、国の事業のお手

伝いをしてきました。そうした国土空間に関する事業では、行政と住民や一般市民、中心になる人が厳しい対立にあるケースが多くあり、それをどうするかということについて、わたしも現場で一緒に中に入ってお手伝いをしてきました。当時関わった事業はダムや河川が多かったです。

そんな中で、空間をどのように考えるのか、という問題がわたしの主要な研究テーマになっていきました。国土空間、日本という国の表面に広がっている空間、これは当然地球という太陽系の一つの惑星の表面であり、地球そのものは地球内部のプレートの、あるいはコアとマントルの運動、それから大気の運動によって、さまざまな変化を生み出しています。大気の運動には太陽が深く関わっているし、潮の満ち引きであれば月との関係も考えなくてはなりません。私たちが生きているこの地球はすべての人類のふるさとです。このふるさとのことをしっかり理解するためには、地球という存在を太陽系のひとつの惑星という、そのくらいの広がりの中で考えなければいけないと思っています。同時に個々の地域の持っている可能性をも考える。場合によってはその可能性についての意見の対立が深い紛争になっていることもあります。そういうわけで、私は2000年から環境のことだけでなく、合意形成や住民参加について研究し、また研究以上に実践もしてきました。実践があって理論化するという感じです。

空間の価値

その中で、今日の話、学びですが、教育で学ぶ、教えるということではなくて、実際のトラブルを解決する当事者の方たちがその作業を通じて、自分たちの生きる空間、そしてその価値について学ぶ、という場にずっと関わってきました。それは本日のテーマである「場の教育」に大いに通じるものと思います。

例えば反対運動が起きるようなケースでは、その地域、その空間を自分のふるさととする人たちと、それに絡む行政、他所から来た専門家、大学の先生、そういう人たちの中での合意形成ということが課題になってきます。それぞれの地域の空間にはそれぞれ固有の価値がある。その価値をめぐって対立が起きている。例えばダムを作るということは、そのふるさとをダムに沈められてしまう人たちには、かけがえのないふるさとを失くすことです。しかしダムを建設する国土交通省のお役人の人たちにとっては、そこに住む人たちに水を確保し、洪水を防ぐなどのメリットを与えるためにやっていることです。そうした空間の価値の認識のしかたが対立のもとになっています。合意形成というのは、その対立をどう解決するかというものです。その中で空間をどう考えていくかということです。



空間を歩く

これは今朝撮った写真です。どこだか分りますか。早稲田の地下鉄の駅から上がったところの風景です。普段何気なく見ているでしょう。駅を上がって高田馬場方面に目を向けるとこういう風景があります。神社があります。名前ご存知ですか。穴八幡神社です。神社ですから神様を祀っています。何という神様かご存知ですか。八幡様を祀っています。では八幡様は何かご存知ですか。応神天皇のご神霊とされていますね。神様は1人ではないのです。八幡と名の付く神社は応神天皇とそのお母さんの神功皇后を祀っているところが多いです。神功皇后、応神天皇はあとから付けられた名前で、古事記日本書紀では、お母さんのほうは、気長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）、応神天皇は、誉田別尊（ほむたわけのみこと）です。ここまで知っている人はほとんどいないでしょうね。

毎日通り過ぎている光景の中に知らないことが沢山あります。知ろうと思えば面白いことが沢山あるのに、な

んとなく通り過ぎてしまうということです。ですから、私が地域に行って問題解決をするときには、まずその関係者や空間をどのように捉えるか、ということを考えます。対立する両者と一緒に地域空間を歩くこともありますし、対立がなくて地方創生ということが目的のこともあります。そういうときも寂れた町をどうするか、地域の人たちと一緒に考えながら、まず歩くということになります。

今日お話する内容は、いま書いている本と同じ『わがまち再生プロジェクト』です。本としてはとても売れそうなタイトルだと思っています。「ふるさと見分けの哲学と実践」というサブタイトルをつけました。この本の最初のほうの話をしたいと思います。

この表紙の写真は先日撮ってきたものです。ここに写っているのは実はわたしです。これは出雲大社の表参道の新しくなったところです。2010年に島根県から依頼されてこの町のお手伝いをしました。とても寂れていて、空き店舗が沢山あって、人もほとんど通らないところでした。これが今物凄いにぎわいになっています。いろいろ理由があります。その過程で私がどんな活動をしたかということをNHKがニュースにしてくれました。そのビデオを見ていただきながら、わたしがその空間とどう関わっていったかということをお話したいと思います。もう1つ、出雲大社を西のほうにいった世界遺産の石見銀山に温泉津（ゆのつ）という町があります。その温泉津の町づくりについても、NHKが私を主人公にしたニュースを作ってくれました。私がどんな風に空間を考えて地域の人たちと討論し、サイモンさんのお話の中にもあった「認識するだけでなく作り変える」ということが、どういう風に進んでいったかを、ビデオで見いただければと思います。

『わがまち再生プロジェクト』の中にはいくつか要素があります。空間のトライアングル、選択のトライアングル、価値のトライアングル、合意形成のトライアングル、社会的合意形成のプロジェクトマネジメント。ちょっと難しく書いてありますが、まとめて言うと、地域に生きる人々が、地域空間の独自性を見出す作業を行う。人々の選択の構造を踏まえる。わが町の再生の理想を掲げて、これを実現するための条件を認識する。市民、専門家、行政が連携して、それぞれの意見の違いを克服して、

わがまち再生プロジェクト ～ふるさと見分けの哲学と実践～

桑子敏雄 著



KADOKAWA

『わがまち再生プロジェクト』の内容

- ・空間のトライアングル
- ・選択のトライアングル
- ・価値のトライアングル
- ・合意形成のトライアングル
- ・社会的合意形成のプロジェクトマネジメント

目標に至る全体のプロセスをプロジェクトとしてデザイン、マネジメント、ファシリテートする。そのための方法ということで、この本は構成されています。

空間にある履歴

今日は空間を捉えるキーワードのひとつをお話したいと思います。

空間には履歴がある。「空間の履歴」という概念です。「空間の履歴」というのは、私にとってとても大事な概念で、1997年の春の寒い晴れた朝、突然天から降ってきました。背中じゅうに鳥肌がたち、あー、これで人生が変わるかもしれないと実感しました。本当にその通りに変わりました。この「空間の履歴」という新しい概念を全面的に組み込み構成したのが先ほどお話した『環境の哲学』という本で、それがわたしを机上の哲学者から、全国の現場に赴き実践研究を行う「地を這う哲学者」へと変えるきっかけとなったのです。「空間の履歴」英語で言うと、Historical profile of space、あるいは Historical profile of the local という感じですかね。地域の中に、積み重ねられた歴史的な経緯が組み込まれているということです。それではビデオを見てください。

ビデオ：「NHK 島根ニュース 神門通りにぎわい復活の仕掛け人」(2014年4月15日)

去年遷宮祭が行われた出雲大社、その大鳥居へと伸びる参詣道が神門通り(しんもんどおり)です。多くの住民が関わる古い町の再開発は調整に時間がかかるものですが、ここでは3年でできました。その影にはある人物がいました。神門通りを視察中のこの人が桑子さんです。桑子さんの専門は哲学。4年前、神門通りの町づくりに関わり始めました。地域の生活道路をにぎわいある通りに作り変える。与えられた時間はわずか3年。関係者の意見を徹底的に集めました。道路の石や街路灯の新しいデザインは、現物を並べて意見を募りました。特に課題となったのは歩道と車道の幅。安心して歩けるように歩道を広げる、いや、そうすると逆に危ない、などの意見が出る中、歩道を1m広げた実験をしたところ、車道が狭くなった分車がゆっくり走るようになった。そ

れがヒントになり、歩道が広がりました。先月の総括のワークショップでは、いろんな意見が出ました。ゴミ箱がないのが不便だ、いやゴミ箱はないほうがいい、等々。合意に至るために大切なのは少数意見だと桑子さんは考えています。新しい考えは少数意見にしばしば隠れているからです。もうひとつ大切なのはユーモア。そうして対立構造を超える構造を生み出すことを考えているのです。

この事業では、島根県に頼まれて全体を担当する総合コーディネーターという立場でした。行政と専門家の人たちと住民市民をたばねる役割です。非常に厳しい3年という期間、そこには工事期間1年も入っていました。道路幅を縮めず12mのまま据え置くということしか決まっていなかった条件の中で、全てを話し合いで決めていきました。

次のビデオは温泉津(ゆのつ)という町で、これは行政から頼まれたのではなく、たまたま泊まった温泉旅館の美人女将に頼まれて、助けなくてはと言う思いでボランティアでやりました。

ビデオ：「NHK 島根ニュース 温泉津の街づくり 街路灯のデザイン案」

街路灯の新しいデザインが住民に披露されました。東京のデザイナーが作った街路灯のデザイン案です。実際に外に出てイメージを膨らませました。温泉津では住民が主体になった街づくりが行われています。背景には平成の大合併があります。59あった自治体が19になりました。これまで行政が担っていた役割を住民に委ねられることが多くなっています。温泉津では温泉街の中央を走る道路の整備を3年かけて行う予定です。旅館事業者の金崎さんは意見がまとまるかどうか不安を抱いていました。大切なのは住民の合意形成が出来るかどうかです。旅館の人も普通の住民もいる。なかなかまとまらない。多数決もいいのですが、どうしてもしこりが残ります。そこで合意形成の専門家の桑子さんに声をかけま



した。専門は哲学。多様な意見をまとめ全員が納得する方向に導くプロフェッショナルです。多様な意見を地域の総意にできるかが一番大切です、と桑子さん。まず住民と町歩きをしました。青い紙には街のいいところ、赤い紙には改善したいところを書き入れる。それを大きな地図に貼り込む。例えば道端の草にも、季節感がある、すっきりさせたいという異なる意見がある。それを認識することが大事です。同じ空間に対してそれぞれの人がいろいろな思いを持っている。それを認識した雰囲気作りをする。桑子さんは一歩引いた場所に身を置いています。桑子さんは住民に発言を促します。住民の中から解決策の提案が出てくる。そのプロセスを共有することを大事にしています。みんなで決めたこと、決めた気持ちを共有することが大事。決断の責任を自らのものとすることによって大変さもあり、喜びも出てくる。先月住民が自由に町について語り合える場所も出来ました。住民が決めた解決策をすぐに実行することで後押しします。批判を提案に変えるということも桑子さんは大事にしています。

こういうプロセスを私は「社会的合意形成」とよんでいます。社会的というのは、誰にも開かれ、参加できるという意味です。合意形成するということは、合意が無い状態から合意が形成された状態へ移行させていくことです。そのプロセスをマネジメントする。スタートがあっ

てゴールがあるような仕事はプロジェクトですから、合意形成そのものもプロジェクトとして、きちんとコントロールできたときにうまくいくということです。その「社会的合意形成」について書いた新しい本『社会的合意形成のプロジェクトマネジメント』が間もなくコロナ社から出版されます。



地域の空間を見分ける

こういう形で、特に「地域空間のまちづくりを地域の人々が主体となって進めるためにはどうしたらいいか」ということをいろいろ考えながら、お手伝いをしています。もちろんトラブルも多くありまして、どちらかと言うとトラブルがあるところにお助けで呼ばれることが多いです。何よりも地域の空間をしっかり見分けることが大事です。見分けることによって、その地域の中にどういうトラブルがあるか、対立があるかということも見えてきます。するとその解決の方策をイメージできてきま

す。ただ自分のやり方を地域の人たちや行政に押し付けるのではなく、みんなで議論をしながら納得できる方向性を見出していくようにします。

ふるさと見分けをするときに、ふるさと歩きと称してフィールドワークをするのですが、そんなときわたしは出発前にみなさんにこんなことを言います。

「今日は皆さん、ふるさと見分けを行います。ふるさとを見分けます。まず地形を見ましょう。地形を見るために雨になりましょう。風になりましょう。光になりましょう。

雨になってみると、地上に落ちた水がどう流れるか、どこへ行くかが分かります。川のどこが洪水になりやすいか見えます。風になれば、地球をめぐる大気とこの地域との関係が見えます。光になれば、太陽と月、地域との関係を見ることになるでしょう。

全感覚を研ぎ澄ませましょう。見えるものだけでなく、聞こえるもの、触れるもの、匂うもの、味わうことのできるものをしっかりと感じましょう。五感すべてを使いましょう。感性をフルに活動させましょう。

さらに地域にとって課題だなと思うこと、地域にとって赤信号だと思うことを赤の付箋にメモしましょう。この点がいいところなので、推進したいと思うことでしたら、青信号ですので、青の付箋にメモしましょう。歩いたあとのワークショップで使いますので、出来るだけ短いキーワードで書きましょう。これはふるさと見分けのヒントで、大きな字で書くことで、アイデアを皆さんで共有することができます。

課題があっても、ダメなところや悪いところがあると考えたり、言ったりしないで、工夫すればよくなると考えましょう。ネガティブで批判的な言葉使いはやめて、常に前向きなポジティブな言葉で考えましょう。そのような言葉使いの中にこれからの町作りの大切なヒントが隠れていますから」

これがわたしのふるさと見分けの極意です。ご静聴ありがとうございました。

シンガポールと場の教育

シンガポール・ラッフルズ学園
ルース・オン・ウェイ・リンさん



名門ラッフルズ学園の高校生などを対象とした体験学習の指導に当たる。生態系文学、指導者養成、場の教育やコミュニティ教育などを教えながら、アジア各地での体験学習（サービスラーニング）プログラムを展開する。

最初に

昨年、シンガポールは、建国 50 年になりました。その年に建国の父、リー・クアンユー氏が亡くなりました。それが自分たちは何者であるかを再認識させる貴重な一年になったのです。彼の死が、自分たちが自分の家と呼べる「場」への、深い感謝を沸き上がらせたのです。わずか 1 つの世代で、開発途上の第三世界から一流の国家に発展させた先人たちの奮闘への感謝の気持ちです。



「場に対する探究と感謝」とでもいうような、自分たちのいる場所と歴史をもっと知ろうと言うような現象が起きたのです。1 週間の服喪期間が設定されました。その間、24 時間、テレビは、リー・クアンユー氏の建国の足取りを示す番組が流れ続けました。追悼の気持ちはかつてないほどに高まったのです。若者も年寄りも障害を持った人も、連日 10 時間の行列をして、弔いに集まりました。待っている間、見知らぬ者同士が助け合いました。ボランティアが飲み物や傘を無料で配りました。この一週間、私心なく、他人を思いやり、やさしく、毅然として行動していました。リー氏が残してくれたシンガポールという素晴らしい遺産によって、私たちはひと

つになったのです。

この経験が、シンガポール人とは何なのかというそれまでの考え方を揺さぶったのです。リー氏の死が、ここまでシンガポール人の素晴らしさを引き出したのはなぜか、シンガポール人のアイデンティティをもう一度確認したい、もっと自分たちの場所について知りたい、という気持ちに火を付けたのはなぜなのか。

次に、教育、特に体験的な場に根差した学びが、今なぜ求められているのかを話します。シンガポールは豊かになっている一方で、格差があり、国家の独自性が流動化し、出稼ぎの移民が増え、差別が起きています。気候変動の影響も受け、生物多様性も損なわれています。小さな島に過ぎない国の中での都市開発と遺産保全とのぶつかり合いも起きています。

次の 50 年に向けて未来の世代が取り組まなければいけない課題が山積しています。

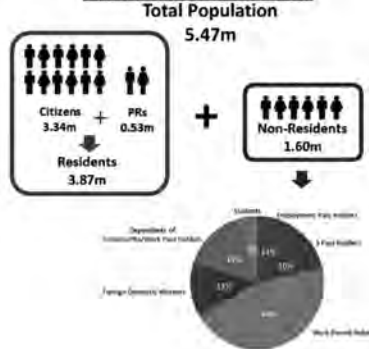
なぜ PBE をするのか

ビームズさんやヒギンズさんが指摘するように、持続可能な開発のための教育（ESD）は、力強いシンガポール人を作るために重要です。自分が何者で、何のために存在しているのかを知り、「持続可能な開発」が持つ微妙さや複雑さ、そして自らの未来のリーダーとしての役割を理解するために必要なのです。私たちがこのシンポジウムで話していることは、PBE などの体験教育を通して、次世代に必要な技術や知恵、つながりや共感する力を備えてもらおうという国全体からの要請に答えたものだと思ふのです。

シンガポールの歴史・地理・社会

かつては植民地であり、移民が築き上げてきたシンガポールは、小さな島の都市国家です。国土は 697 平方キロメートル。1 割は埋め立て地です。そこに 550

Diagram 1: Total population, as of June 2014¹



万人が住んでいます。どれだけ小さいかという点から端まで自動車で、1時間ですべて回ります。世界で最も人口密度が高い場所です。人々はほとんどが、政府が作った高層アパートに住んでいます。地理的には温和な熱帯気候の場所にあり、自然が豊かに育つ場所です。都市開発ですでに90%の森を失ってはいますが、それでも多くの植物、陸上や海の動物が存在しています。1960、70年代に、猛烈な都市開発が行われました。新興国家として、過密化やインフラの不足、住宅難などに対応するためです。スラムを一掃し、公共住宅を提供し、経済を成長させるために、工場用地を確保し大規模住宅開発が行われ、多数の集落の移転も行われました。その結果、自然は、その場所の記憶や物語とともに急速に失われてしまいました。都市開発と生態系保全、歴史保全とのぶつかり合いという古典的な出来事でした。1980、90年代から今までは、急速な経済改革や開放的な貿易促進、海外からの投資の呼び込みと外国人の雇用が続き、人口が急増しました。

浮き上がってきた課題

歴史的、地理的、経済的、社会的な面から、あちこちで心配される事態が起きてきています。

1：断絶された感覚

都市開発を通して自らの場が失われて、いるべき場所から追放されたという感覚が生まれました。それぞれの場所にまつわる記憶、過去、物語が失われました。多く



の歴史的な地域が、商店街になり、道路になり、アパートになっていきました。例えば、80年の歴史があったスンゲイ（Sungei）路市場は、数百人の高齢者ともども移転させられて、公園と居住区域に変わることが2014年のマスタープランで明らかになりました。そこ

に住むお年寄りの収入源にも打撃がある計画です。

別の事例は、地域の高級化を目指した再開発です。ティオンバール（Tiong Bahru）地区では、低所得者を移住させて、中・高所得者の町にして、特別なコーヒーを提供するカフェや高級食材、おしゃれな店舗が、古い店に取って代わり、その地域の社会的空間的な構成を変えてしまっています。

2：開発による、遺跡や生物多様性、歴史の喪失

昨年世界的に

にも注目されたのが、ブキット・ブラウン（Bukit Brown）の事例でした。19世紀半ばに最初に移住してきた中国人の人々が眠る



墓地です。10万人分の墓が、開発のために掘り起こされる直前という状況に陥っています。反対運動が始まり大きな議論となっています。

もうひとつは、チェック・ジャワ湿地帯のパラウ・ウビン（Pulau Ubin, Chek Jawa Wetlands）です。環境活動家の活動のおかげで、豊かな生物多様性が保たれ、称賛されています。

3：孤立と孤独の拡大

シンガポールは社会の高齢化が世界でもっとも速く進んでいると言われます。高齢化するなかで、一人暮らしの人が増えています。高齢者の自殺が近年増大しています。信頼出来る人を失い、人付き合いをしなくなって、それが高齢者の心理的な健康状態を悪化させています。

4：移民流入によるアイデンティティ問題

人口問題や移民、外国人の流入増加などに関して、つねに議論されるのが、「外国人嫌い（xenophobic = ゼノフォビク）」の問題です。2013年に発表され、移民



の受け入れの必要性を説いた「人口白書」に対しては、「シンガポール人のためのシンガポール」という抗議活動がわき上がり、ホンリム公園でのデモにつながりました。シンガポールの将来は、多様性を確保しつつ同時に、高度に国際化された社会の文化とどう調和して共存していくかに、かかっていると思います。

このような環境面での課題に対応するために、シンガポール政府は、多様で高度につながりあった緑の空間に彩られた都市の景観を作り出す新しい都市開発政策が定められました。ニューマンが、生物との親和性のある都市づくり (biophilic urbanism) と呼ぶ考え方です。「公園の中の町」というものです。人々がより多くの時間を自然とともに過ごすことができるようにして、緑の空間との関係づくりを目指す考え方です。

社会的側面という和政府は国民のつながりづくりに社会的資本を投下したいと考えています。最近では「カンポン精神 (Kampong spirit)」という言葉が政府が繰り返し使っています。カンポンというのはマレー語で村を意味します。互いが相手を気遣いあう、家と家では考え方は違うけれども、お互い納得して、妥協してやっていこうという精神です。

シンガポールでの体験教育と場

「綾なす社会」という言葉は、1966年にシンガポールで徴兵制が導入された際に人々を結びつけるために使われました。1976年、もたらされた経済的な豊かさが若者を弱くすると恐れたリー首相は「手を使おう (Use Your Hands campaign)」キャンペーンを始めます。週末、生徒だけでなく、親や教師や公務員が学校に行き、教室を掃除し、窓を磨き、校庭の草抜きをするのです。2015年になってもシンガポールの首相は、あの相互協力が私たちの社会の強みだと選挙で語っています。1990年代には生徒たちは国際的な冒険組織であるアウ

1990s.. Schools students on OBS..



トワードバウンド協会のシンガポール支部でのプログラムに参加させられました。

教育省は、綾なすことの価値をいまでも掲げていて、個人や組織を育てるために野外での冒険活動を推奨しています。残念なことに昨年は悲しい年でした。マレーシアサバ州のコタキナバル登山に行った学生たちが地震の被害にあい、教師2人生徒6人が犠牲になったのです。しかし、現在の首相リー氏は、これは事故であり、冒険教育の価値を今後も追求すると言っています。

野外体験に対する国家的な認識に安心する一方で、残念なのはこういう体験が一過性のものになっている点です。訓練された野外教育者の不足、学校から外部事業者への過度な依存、学科の授業時間のかねあいなどが、体験教育の発展を阻害する要素となっています。

シンガポールはまた、他の先進国と同じような、わなにはまっています。子どもたちが外で使う時間が減っているということです。

書類の山に追われ、時間がなく、学科重視のカリキュラムにしばられるという状況の中で、デューイがいう、主題と手法、カリキュラムと子ども、理論と現実が、シンガポールの教育の中の大きな課題となっていると思います。

ラッフルズ学園の取り組み

「私たちは、試験への偏りを正して、もっと学びへの愛というものを育てるべきだ」。

つい数日前の1月19日、シンガポールの教育相はこう発言しました。私はこれこそが体験教育やPBEの本質だと思います。私の所属するラッフルズ学園の学園長はこう言っています。「学校というものは、つながりがない社会の部分部分をつなぐ社会的な接着剤になる必要がある」。それぞれの学校は、社会的な弱者、人間活動による環境破壊、高齢化社会での孤独化といった課題に対する解の一部となるべきなのです。ラッフルズ学園では、実社会を通して遺産保護や生態系理解、サービスマーケティングなどといった手法でPBEを展開しています。さまざまなプログラムを通じて、生徒たちが自ら地域をより良くしていく責任ある市民になれるよう意識付けられ、教えられ、自ら育っていくことを願っています。



ビシャンになる

いまの生徒たちと、10人の卒業生が加わって、学校の資料博物館と一緒にいるプロジェクトがあります。私たちの学校が建っているビシャンという住宅地域の歴史を掘り下げる活動をしました。もともとは墓地として使われていた場所です。考古学者にも協力してもらい、写真や遺物、古文書を分析し、聞き取り調査もしました。パンフレットを作り、展示はシンガポールのあちこちの博物館を巡回しました。

ビシャンの歴史をなぞるだけではなく、時を重ねてビシャンという地域を形作ってきた課題や価値を、その住民たちが振り返るきっかけになることを期待していました。生徒たちは、このパンフレットを通じて、近代的で豊かな新住民たちが、過去の村の住民たちに親しみを覚え、ビシャンの新しく強いアイデンティティが作られることを期待しています。

このプロジェクトを通じて、地元の人々にアイデンティティを植え付けようとする、生徒たちの国への思いというものに私自身感銘を受けました。先ほどのプキットブラウン地区での話と同じような事例だと感じます。

生態系の理解

同じような発想で、遺産保全のほかにも、生態学の視点で環境を通して学ぶという生態系理解プログラムがあります。生徒たちは、研究者になり、筆者になり、イラストレーターにもなって、子ども向けの絵本を作ります。

生徒たちは自然保護区に入って命を育む自然の仕組みをより深く観察します。「もっと近づいて、もっとしっかりと、もっと長く」観察するのです。

時間と場所を与えることでより深い理解が出来ます。観察記録をつけることで、自らの学びを主体的に考え、質問を重ねることで好奇心を育てていきます。野外調査をし、木やハーブを裏庭で育て、価値感や土地とつながっている感覚を深めていきます。学年の終わりには、ある保護区や公園に関しての子ども向け絵本が出来上がります。生徒たちからは「知識としてその場をどう理解するかという段階から、気持ちの上でのその場との結びつき



へと深まっていくことで、子どもたちに向けての絵本を作りたいというわくわくした気持ちになりました」などという声が出ています。これまでにシンガポールのプラウ・ウビン、スゲイ・ブロー、マクリッチー保護区など11の場所を説明する絵本が出来ています。多くの卒業生が環境保護の道を選択し、がんばっています。

自転車旅での学習

この自転車の旅は、シンガポールにある水路や公園網に沿って実施されます。人間の生活が、シンガポールの



Learning through landscapes-
Cycling Learning journeys on waterways



それぞれの地域で土地とどう関わっているのかを探ります。土地に限りがあるシンガポールで、自然と都市のせめぎ合いがどうなっているか、自然がいかに私たちの命を支えてくれているか、開発が土地をどのように利用しているのかなどについて、現場での具体的な話を通して、生徒たちは深く理解をしていきます。コンクリートの護岸で囲まれていた川を、自然な岸辺に戻すことで、岸辺の住宅街に住む人々が自然に親しむことが出来るようになった事例を見たりします。こういうことを通じて生徒たちは、シンガポールの景観を理解し、さまざまな人々の暮らし方に対する興味を高め、人間や政府の動きがどのように影響を与えるかの理解を深めていくのです。

社会的な活動を通じた地域教育

語り部といわれる人たちが、シンガポールでの外国人労働者として、それぞれの物語を話してくれます。シンガポール人としての彼らの貢献を知り敬意を持つことが狙いです。生徒たちは通りにいる外国人の労働者にインタビューします。彼らの日々の暮らしについても踏み込んで話を聞いていきます。その話を、ソーシャルメディアに投稿するのです。この対話を通じて、外国からの友人たちもシンガポール社会の一部で、よそ者という意識を薄め、彼らへの共感と思いやりを育てていきます。

国内でのサービラーニング

世代間の断絶や社会正義を解決するために去年始まっ



たばかりのプロジェクトです。学生ボランティアが、政府が補助するアパートの住民の様子を理解しようとしています。一人暮らしの高齢者や問題を抱えた低所得者が多い住宅で、生徒たちは部屋の掃除などの手伝いをします。さらには、補助金を自分たちで獲得して、部屋のランプを増やしたり、手すりをつけたりしています。部屋を消毒したり、ペンキを塗り直したり、片づけたりという様々な方法での手伝いをしています。こういった活動を通じて、生徒たちは、高齢者が直面する問題を知り、人と人との関係やつながりの大切さを理解するのです。

海外でのサービスマーケティング

海外でのサービスマーケティングプロジェクトでは、周辺各国と一緒に活動をし、地域の中でのシンガポールが果たせる役割を理解することを目的としています。生徒たちは、訪問先のコミュニティで必要なことが何かを分析し、課題を議論し対応策を考えます。そのコミュニティの一員としての自覚を持つようになり、その現場であるインドネシアのバタン島の学校を支えるための資金集めもしました。2週間の現場での活動を通じて、世界的な視野の獲得や社会的な責任の自覚を得るだけでなく、自分自身の場とは何か、シンガポールでのアイデンティティとは何かを考え直し、幸せの意味を問い直すのです。



生徒たちの一人、インドネシアから留学してきていた女子生徒は、自分がこれほど大事な存在と初めて感じたと話していました。現地では、彼女は地元の小学生たちの通訳として、すべての教室で必要とされていたからで

す。彼女にとっては、地元でのサービスマーケティングだったのです。初めて自分の国が自分にとっても多くを期待していて、そのために働くことが出来る、初めて自分に何か特別な力を与えられたと感じたといいます。PBEはそのような影響を生徒たちに与えることが出来るのだと思います。

シンガポールは、良い50年を過ごしました。開発への妥協や挫折がなかったわけではありません。次の50年は、次世代の指導者たちがどう政策を作っていくにかかっています。その政策は、生態系や人間関係や文化の損失を単に避けるだけでなく、個人も地域もアイデンティティもが自然の中で回復出来るようなものでなければなりません。

教育は、いつの日かの収穫を期待しての種まきのようなものです。

さまざまなPBEの仕組みを通じて、一時に一人ひとりに対してではあるかもしれませんが、その存在している場とのつながりを作り直せるように支援することが出来ると信じています。

リー・クアンユー氏の死が私たちの土地への深い愛と感謝の念を巻き起こしました。それと同じことが、PBEは私たちの次の世代に対してできると思います。

最後に、リー・クアンユーの言葉を紹介します。

「国というものは、その大きさによって決まるのではない。人々の団結、活力、そして人々の規律によって決まる。もちろん、私たちは将来の指導者の質を高めるよう努力している。私たちが、より良く、より良い場で生きていくために」。

“A nation is great not by its size alone. It is the will, the cohesion, the stamina, the discipline of its people and the quality of their leaders which ensure it an honourable place in history.”

Mr Lee Kuan Yew
1963



Singapore and Place-Based education

Ms. Ruth Ong Wei Lin, Raffles Institute, Singapore

Ruth Ong Wei Lin is part of the experiential learning team in a junior college in Singapore, Raffles Institution, spearheading programmes such as ecological literacy, leadership development, place-based and community education. Ruth is an experiential educator with a Master Degree in Mass Communication from Nanyang Technological University.

Introduction

Thank you for the opportunity to speak on behalf of a school in a little red dot, Singapore. Please allow me to take some time to give you a context on an event last year that impacted us as a nation, which I felt has great relevance in our discussion of place-based education in Singapore.

We have recently concluded our 50th year of nationhood. It was a remarkable year of soul-searching as we experienced the passing of our founding father, Mr Lee Kuan Yew during our year of jubilee. His departure sparked off a sense of deep gratitude towards this “place” we call “home”, for the price paid by our forefathers who fought and turned Singapore from 3rd world to 1st within a generation. There was a great awakening phenomenon of “place-based inquiry and appreciation” amongst the citizens to know more about our past and our place. It was during the week of mourning which was declared.

Within that short week, 24 hours of Mr Lee Kuan Yew’s journey, speeches and footages of nation-building process screened on TV and the outpouring of grief was unprecedented. Citizens, the young, old and the disabled queued up to 10 hours, to pay their last respect. Strangers cared for one another while waiting. Volunteers distributed drinks and umbrellas for free. In that one week, we saw people who were selfless, people who were looking out for each other, who were unwavering, who were kind. All of us united by one legacy that Mr Lee has left us with, Singapore. This experience challenged the paradigms of what it means to be a Singaporean. Why did it only take



the passing of Mr Lee Kuan Yew to bring out the best of Singaporeans, ignite the upsurge of defining this Singapore identity and desiring to learn more about our land?

In the next 20 minutes I’d hope to illustrate on why the role of education, particularly in the area of experiential/place based learning is imperative in this changing landscape of Singapore with growing affluence, income inequality, elusiveness of national identity, influx of immigrants, marginalization of people groups, climate changes, compromising biodiversity, dilemmas between urban development and heritage conservation in this land-scarce Island State. These are the challenges the future generation needs to address to bring Singapore to a next milestone in the 50 years that follow.

Why do we do place-based education?

Education for sustainable development or ESD as mentioned by Prof Beames and Higgins, is important to build resilient Singaporeans who knows who they are and what they stand for, understanding the nuances and “tradeoffs” that constitute sustainable development and thereby understanding their role as future leaders. I believe what we have been talking about here in this symposium; in relation to experiential education such as place-based education is a response to the nation’s call to equip the next generation with relevant skills, knowledge, sense of connection and empathy.

Historical/Geographical/Social context of Singapore

Singapore with a colonial past, immigrant heritage, is a small island city-state with a land area of 697 square km inclusive of 10 % of land reclamation is home to 5.5million people. To give you an idea on how small Singapore is, it only takes only about an hour drive from one end to the other end of Singapore. It also one of the most densely populated cities in the world with most of its people living in government built high rise apartments. Singapore's geographical location and its equable tropical climate support lush natural vegetation. Despite the fact that we have lost more than 90% of its original forest cover over to urban development, we are still home to a huge diversity of plants, terrestrials and marine animals. During the 1960s and 1970s, extensive urban renewal projects were undertaken to address the problems of a new nation—overcrowding, inadequate infrastructure, and lack of proper housing. The critical tasks for the government then were to clear out the slums, provide public housing, and encourage economic growth by creating space for industries, urban development displaced large number of settlements and caused rapid loss of landscapes along with its memories and stories. This was the classic case of a dilemma between the urban development, ecological conservation and heritage preservation. During the 1980-90s and up to the millennium, there were rapid economic reforms, open trading policies and attracting of investments and massive foreign employment and burgeoning of population.

Areas of concern evolved

In the light of the historical, geographical, economic, social underpinnings, there are a few areas of concern that have been evolved overtime:

1.Sense of Displacement and Disconnection

Sense of displacement through the loss of a “sense of place” with urban development and loss of memories, pasts, and stories connected to the spaces. Many historical areas have to give way to malls, roads and apartments. An example will be Sungei Road Flea Market with eight decades of history will be relocated for Master Plan 2014 under parks and residential usage thereby displacing hundreds of elderly and



impacting their source of livelihood.

Another example is the threat of gentrification in neighborhoods such as Tiong Bahru- “displacement of a lower-income population from neighborhoods by new groups of middle and upper class residents” where new cafes offering specialty coffees, upmarket bakeries and “indie” shops have rapidly taken over old business establishments, in the process transforming the social-spatial fabric of these places.

2.Loss of heritage/biodiversity/history due to urban development

One example which has gained worldwide attention last year was the Bukit Brown, the cemetery, which has been the final resting place of pioneering Chinese immigrants to Singapore since the mid-19th century, the 100,000 graves are pending to be hauled up from the ground to pave the way for “development”. This has caused an upheaval of activists and controversy. The other example is Pulau Ubin, Chek Jawa Wetlands which lauded to have rich biodiversity were preserved upon environmental activists’ lobbying



efforts.

3. “Epidemic” of Isolation/Loneliness

“Singapore is growing old faster than any

society in the world". Ageing population gave rise to many elderly staying alone, in recent years; the trend of elderly suicide is rising on an alarming rate. Lack of trust and human connections overtime is detrimental to the psychological health of elderly.

4. Debate on national identity with influx of immigrants

Issue of rising "xenophobic" sentiments and national identity will always accompany any debate on population, immigration, and the influx of foreigners. "Singapore for Singaporeans" protest against the population white paper at Hong Lim Park is an example of Singaporean's reaction to the population growth. The future of Singapore needs to embrace diversity and learn to live in harmony with cultures in this highly globalized society.

National agenda and responses to pressing issues

In response to the above issues, on the environmental front, Singapore's strategic urban planning policies have created an urban landscape punctuated by heterogeneous and highly-connected green spaces – what Newman (2014) calls 'biophilic



"Kampung"
means Village in
Malay Language

- Also refers to
"Community
Spirit"

urbanism'. "City in a Garden" This is to help citizens to spend more time with nature thereby creating a relationship with the green spaces. On the social front, Singapore recognizes its needs for social capital to build cohesion amongst Singaporeans; the Kampong spirit has been a buzz word in the government policies. Kampong (which means village in Malay) is the spirit of mutual consideration, of neighbours knowing that even as preferences differ from household to household, there is understanding

and compromise.

Outlook of Experiential Education/Place based in Singapore

The image of a 'rugged society' was used in 1966 to prepare a disparate people for the introduction of compulsory National Service. In 1976, when Prime Minister Lee feared that newfound affluence would soften the young, he initiated the "Use Your Hands campaign". This early experiential learning initiatives got students, parents, teachers, principals and civil servants back to school on weekends to scrub classrooms, clean windows and weed gardens.. Singapore's prime minister, during his 2015 rally speech, mentioned that that self-reliance and mutual support are our strength. In the 1990s, school students were sent to Outward Bound Singapore for leadership training. The Ministry of Education of Singapore continues to value "ruggedness" and outdoor adventure experiences to build individuals and teams. Last year was a dark year for experiential education, as the nation mourned the death of 6 children and 2 teachers died due to the earthquake in Sabah while hiking at Mount Kota Kinabulu. However, PM Lee acknowledged it as an accident and urged that adventure training will go on for its value. Heartening to see the national stand on such outdoor experiences, however, these experiences are episodic instead of continuous. Lack of trained teachers in outdoor education, over reliance on external vendors to run programmes for schools, the constant contests between available time and demands of curriculum are some obstacles for experiential education to soar higher.

Singapore as a developed nation falls on the same trap as of many developed countries; of the reduction of time children spend outdoors. With constant challenges in the perception of paper chase, lack of time, intense academic driven curriculum, as according to Dewey, persistent dichotomies between subject matter and method, curriculum and the child, theory with reality is perennial to Singapore's education.

What's then the role of educational institution such as RI? What should be the responses of schools to the issues our

nation is facing?

Singapore's Minister of Education, on the 19 January, a few days ago said that we should foster love of learning and reduce the focus of exams. I believe that is the heart of experiential education and PBE. In Raffles Institution, the principal said that a school needs to be the social glue between the part of community that has no contact to each other. Schools ought to be part of the solutions to these issues such as social exclusion, intolerance, environmental deterioration through human factors and epidemic of "loneliness" in aging populations. In Raffles Institution, there are place-based education programmes which include Learning through landscapes, heritage conservation, Ecological Literacy, Social Advocacy and Service-Learning programmes. These programmes hope to produce students who are more aware, informed, caring and hopefully, convicted to be the responsible citizens contributing positive changes in their community.

Becoming Bishan

This is a project in collaboration of the school's archive museum, 10 alumni and current students dedicated hours in digging up the history of the history of a residential precinct in Singapore, Bishan, where RI stands right now as we, which used to be a cemetery. They partnered with archaeologist, analyse photographs, artefacts and documents, conducted interviews. They created a booklet and exhibition which tours around Singapore's library. It seeks to be more than just a re-narration of the history of Bishan but to inspire reflection among Bishan residents to reflect on the values and challenges that have defined Bishan through the ages. The authors also hope that the typical cosmopolitan and affluent resident of

today will be able to find an affinity with the kampong residents of the past and use this to forge a new and stronger Bishan identity. From this, I'm impressed by the students' love for the nation to want to instil such an identity for its people. This project juxtaposed strongly with the example of the story of Bukit Brown, which I have mentioned earlier.

Ecological Literacy

In the same spirit, besides heritage conservation, learning through landscapes from ecological point of view, for our Ecological Literacy programme, students are researchers, authors, illustrators of children books in our Ecological Literacy Programme. The elective take students into the nature reserves so that they can better understand the natural systems that undergird life. With a constant mantra of "Look closer, look harder, look longer", the importance of giving time and space to explore these issues in greater depth. Through nature journaling, students take ownership of their own learning, harness curiosity through questioning and critical inquiry, they go through field trips, growing their own plants, herbs at the backyard, these are process that cultivates values and connection with the land. Their end of year project is showcase a particular nature reserves/ green space into children book. From the words of the students, "it's been a meaningful move from theoretical understanding of sense of place to feeling a deep emotional attachment to the place that stirred me to write books for children". So far, the school has produced 11 children books showcase different nature reserves of Singapore such as Pulau Ubin, Sugei Buloh, Macritchie Reservoir. Many alumnus of the programme went on in careers in environmental conservation and continue to advocate in their own ways.

Cycling Learning journeys

Cycling Learning journeys are conducted along waterways and National Parks Boards' Parks Connector (PCN) students explore how human activities affect the design of and land use around the precincts in Singapore. Interpretive approach to the landscapes helps students gain insights into nature-urban tensions in land-scarce Singapore, appreciating how nature shares our lives and how development



in turn re-shares the land. An example will be to see how the government turned concrete canals into naturalised rivers along the residential areas to allow people to be connected with the nature. This discussion's motivation to learn, reflection trail heightens students' awareness to the sights of Singapore, nurturing curiosity about the lifestyle of diverse groups of people, appreciate and gain insights on impacts of human and government interventions.

Community Education through social Advocacy: Storytelling workers

The Storytelling Workers is an example of a project that shares the personal stories of migrant workers in Singapore, and aims to encourage respect and recognition amongst Singaporeans for their contributions to our country. Students conducted interviews with migrant workers along the streets and interacted with them to gain insights into their lives, thereafter stories were posted on social media. Dialogues and narratives of such stories aim to normalise the presence of migrant friends in our midst thereby creating less "otherness", but more empathy and care towards them.

Service-Learning Programmes: Local

To address issues of intergenerational gap and justice, a project started last year by student volunteers through understanding the situation in the households of families in government aided flats. Students are gathered to do house cleanings blocks located around the school vicinity which are for the low-income families/elderly who stays alone/trouble families. One example of a project that took off further was students set out to improve the living conditions of the elderly by installing equipment such as ramps and handle-bars in their homes through application of a government grant. They also improved the homes in other ways, including fumigation, painting and cleaning. Above all the work, students learnt the challenges face by elderly, understand the importance of human relationships and connections.

Service-Learning Programmes: Overseas

A yearlong overseas Service-Learning Project seeks to work with neighbouring countries and understand how Singapore can play its role in a

regional context. Students did needs analysis needs communities, discuss on issues and develop action plan to act upon it. They felt a sense of commitment towards the people and they fund-raised the amount to support a local school in Indonesia, Batam. The 2 weeks overseas experience not only develops a greater sense of global awareness and social responsibility but also re-calibrates the students' sense of place and identity in Singapore and what it means to be happy.

Before I end off, I just want to share a story of students' reflection; a student from our International service-learning elective who is an Indonesian took part in a project in Indonesia last year. Upon the trip, she shared that that was the first time she felt "so important", as she was needed in every classroom to translate for others and to connect with the children they served. She felt that as an Indonesian, this experience was a "local" service-learning experience for her. That was the first time she felt the tremendous need in her own country, first time she felt compelled to do something for her own country and she first time felt empowered that she is able to make that difference. Place based education has the potential to make that impact in students.

Singapore has had a good 50 years but not without compromising and giving in to development. For the next 50 years, it depends largely on how its future leaders will develop policies that cannot only be preventive of loss of ecology, human relationships and culture but more importantly, these policies have to be restorative in nature for individuals/for community/for our identity. Education is sowing seeds, anticipating fruition someday. Through various platforms of PBE, I believe we can begin to influence one person at a time restoring connections and roots from the very place where one is.

The death of Mr Lee sparked off Singaporean's deep sense of gratitude and love of to our land and I believe, PBE has the potential to do so as well, to our future generation. I leave you with a quote from Mr Lee, "Truly the nation is not determined by its size, but it's cohesion, it's stamina, discipline of the people and of course all of us are trying to do to increase the quality of our future leaders so that we can live a better life and also in a better place where we are."

分科会「自然保護活動：地域の自然を知る価値」

モデレーター：佐久間憲生さん、横山隆一さん

課題① 地域の人との関わり

話題提供：

公益財団法人トトロのふるさと基金理事
関口博一さん

埼玉県所沢市の「北野の谷戸」の回復・保全活動をしている。2005年に所沢市の最終処分場の最有力候補地に挙げられ、これを地域住民の働きによって回避することができた。長いあいだ水田耕作が放棄されていたこの土地をどのように活用してゆくか地元の方々と話し合いを重ね、田んぼを復元することになった。

地域の方々やボランティアの方々の協力を得て復田作業を進め、2015年から里山保全地域に指定された。しかし、活動を始めた頃に田んぼの作り方などを教えてくれた地元の人々の参加が、年々少なくなっている。

解決提案：

- ・「よそ者」感を減らす

都市から地域への訪問者は一過的、イベント的になりがちであり、それが地元の人の参加を遠ざけているのでは。細くてもいいから、こまめに連絡を取り合って、「とりあえず繋がっている状態」を長く保っていくことが結果につながっていく。

- ・ソーシャルでエモーショナルな学びの場を作る

ただ自然を保護しようとする目的ではなく、互いに自然から「学ぶ」ことを目的の活動にする。「誰か」がやる活動ではなく、「みんな」で活動していくための仕組みづくり。

課題② 都市への人口流入・地域の人口減少

都市の人間が地域へ自然保護活動をしに行くのは、地域に人がいないからではないか。

解決提案：

- ・アンバさんのナガランドの例

村に残っている人でコミュニティを作り、ランドア



セスメントを行い、地域の状態を知る機会を設けた。その上で、野菜や水田にする土地、自家消費用、販売用の農地など区分けをした。村の外に住んでいても、土地を維持するための投資は自由にできるようにし、そこで投資と人のコネクションを作った。

- ・ふるさと納税を活用する

ふるさと納税のお返しを、生態系そのものにしてみる。古民家に宿泊できたり、田植えに参加できたり。さらに、「里山保全のための税金」と言った目的税にできないか。

課題③ 担い手・後継者不足

里山にはお年寄りしかいない。自然保護活動、場の教育は散在している。属人的なつながりで耐えてきた活動に限界がきているのでは。

解決提案：

- ・日本全体、海外に視野を広げる

属人的・属場所的ではなく、日本全体に関係と担い手を育成する社会的仕組みを作る。

海外の人が来ると、コミュニティが活発になるのではないか。海外の人は、「通う」形ではなく、「引越す」「住む」という形で地域に入っていくことが多い。そのことが地域の人たちの受け入れやコミュニティの活発化につながっているのでは。

まとめ

- ・場所は違えど悩みが共通していて面白かった。
- ・都市と地方では生活習慣が異なり、同じ場で生活していくというのはもともと難しいこと。単なる「体験」ではなく、「習慣」になればいいのではないかと思った。
- ・活動はプロセスがあり、各ステップで新たな目的を立てて継続していくことが大切。
- ・担い手のつながり、育成のための東北自然保護の集いで大切にしているのは、違いを認めることとメンバーシップを発揮すること。こうして集まった人たちがつなげてとなっていく（佐久間さん）。

分科会「学校教育：PBE は学校を変えられるか」

モデレーター：安藤聡彦さん

話題提供：大森享さん（北海道教育大学）

小学校教員であったときの「地域に根ざす学び」事例
・「僕らはトンボ探検隊」（小学 5 年）

水銀垂れ流し問題で移転した工場跡地がトンボの楽園に。屋上プールのヤゴを採取・飼育・観察し、羽化後はトンボの生息環境を調査し、市民運動により誕生したトンボと共存できる公園づくりを学んだ。

地域をつくる主体は地域住民であり、民主的手続きを踏んで地域を変える方法を学んだ。



・「河川敷にトンボ池を掘る」（小学 3 年）、「児童公園改修」（同 6 年）

自然体験学習によって、「きたない・あぶない・近寄らない」荒川観が、「生き物いっぱいの自慢の場所」に変化し、生き物の生息場所をそのまま保存したいと思うようになった。そして生き物が生息しやすいように、保護者の協力も得て「トンボ池」（2m×6m×1m）を掘った。生き物いっぱいの自慢の場所へと「荒川観」が変化した。児童公園の授業では、子どもたちが身近な児童公園をフィールドワークし、自分たちの要求をまとめ、関係者を集め、発表し合意形成する民主的手続きを踏んで公園を改修した。ブランコの高さを上げた。樹木に手作り鳥の巣箱を設置した。毎月 1 回市民に呼びかけて、清掃活動を実施した。



よりよい環境を作る原体験としての社会参画。



・「くしろ森の楽校」

大森研究室が主宰。年 6 回、小学生が大学生のプレイリーダーやボランティアと近隣の牧場（170ha）の協力で実施。異年齢で森と川に自由に関わる実践。



山菜を取り、天ぷらにして食べる。釣りをし、焼いて食べる。自分（たち）の木を決めて遊ぶ。木登り、ツリーハウス、ブランコを作る…。「遊ばされること」から遊ぶことへ。

・まとめ

今彼らはどうしているのか。学校の教育が受け身で面白くない。教育の重要性を感じ教員へ。イギリスやインドへ一人旅などさまざまな活動をしている。

分かることと実施することを結ぶ教育が必要。

分かるとは、より正確により豊かに表象化されること。より良い環境を創出する、原体験を子どもたちに組織する教育が必要。

ルースさんコメント

子どもは単に教えられる存在ではない。子供を学びの中心に置く重要性。そうした取り組みを準備する教師の仕事の重要性を感じる。個人としてではなくコミュニティの中で学ぶことの素晴らしさがある。教育で重要なのは楽しいこと！そのことは記憶にも残る。種まきとしての教育だと感じた。

分科会「ふるさと再発見：日本各地の風土、地域に根ざした学び」

モデレーター：阿部治さん、桑子敏雄さん

議論 1. 地域の誇りをどう取り戻すか

(阿部さん) 今地域では産業、人口、誇りの3つの空洞化が生じている。まずは地域の誇りをどう取り戻すのか検討していきたい。



- ・環境が変わると人も変わる。変化したという実感と地域を良くしたという達成感が原動力となる。
- ・自分達の地域の良さに気づくこと。
- ・新しい人を受け入れる（若者×大人、地域おこし協力隊をうまく機能させるなど）
- ・自分達で盛り上げる（自分達で公共事業を行う、学校と地域をつなげる、子育てしやすい街にするなど）
- ・みんなで共有する場を設ける→地域のアイデンティティ確立にもつながる
- ・プロジェクトベースで活性化を進める。

議論 2. 地域活性化＝観光地化に疑問

(猶井さん) 地域活性化のために観光地化し、そこでの風土や暮らしなどが失われてしまうのは果たして本当に活性化になっているのか。

- ・現金収入という点では最初の取っ掛かりになる。
- ・観光地化と一口で言っても、その内容は様々であり、どのような観光地にしていくかが重要である。
- ・コンサルが入ると型重視になってしまう。→住民がどう作り上げるか。住民が議論して作り上げること。
- ・空間が変わることで意識も変化する→プロセスをデザインする。段取り、手順、仕掛けを考えることが重要。

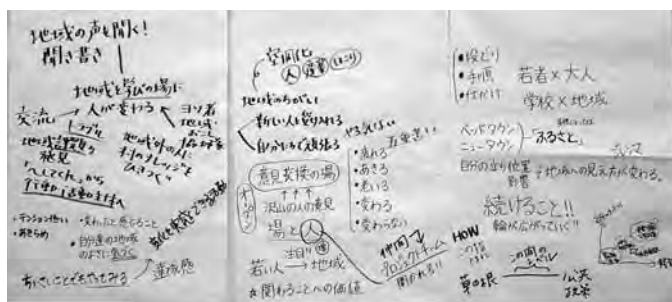
議論 3. 中途半端な住宅地について

(村上さん) 都会と田舎の中間、中途半端な住宅地は地元愛が少ない。これからはこのような地域が多くなり、問題になるのでは。

- ・ここに住むということは、子供にとってそこがふる里になる。
- ・親、地域共同して地域を作り、(町内会など) そのような事例を増やすことが重要。
- ・新興住宅地になる前、地域はあった→そのようなところでこそ、そこでの良さに気づくことが大事

その他意見

- ・自分の立ち位置などで地域の見え方が変わってくる。
- ・その場に縛られるとやりたいことができない、でもその場で何かやりたいというジレンマが生じている。



阿部さんまとめ

- ・活性化とPBEは違う。しかし今後は繋がっていかなければならない。
- ・どうしたらよいか、というのはわからないが、今生きている人、これから生きる人が元気であることと、自然と人間の関わりをベースとして考えることが大切である。
- ・1人1人のパワーを次につなぐこと。
- ・環境活動やPBEの可能性を考えること。社会を変えることが大切。

桑子さんまとめ

- ・日本は気象現象、自然の恵み、営みが感じられる面白い場所。
- ・もっとグローバルで地球の上で生きている喜びを感じる
- ・問題もつまらないこともたくさんあっていい。そこから何か生み出せば良いこと。
- ・諦めてはいけない。
- ・続けることで輪は広がっていく。



分科会「冒険教育：冒険のディズニー化。PBEはどうあらがえるか」

モデレーター：佐々木豊志さん

問題提起（サイモンさん）「冒険のディズニー化について」

イギリスの子供たちが参加している冒険教育は、とても質が悪い。ブラマンの「ディズニー化」という論文が参考になる。また、リッツァーが「社会のマクドナルド化」とも言っている。そして、ロインズはどこで何を食べても全て同じという資本主義化とも言っている。

今起きていることは、自然を無視している。冒険と呼ぶが冒険ではない。与えられた商品を消費するだけでスキルを身につけている訳ではない。全てコントロールされている。こういうシステムがあると家族を預けておいて良い！と思う人もがいる事も理解しないといけな。それを楽しむだけならいいが、それを冒険として言うのは違うと思う。

- Bryman, A. (1999). The Disneyization of society. The sociological review, 47, 25-47.
- Bryman, A. (2004). The Disneyization of society. London: Sage.
- Loynes, C. (1998). Adventure in a bun. Journal of Experiential Education, 21(1), 35-39.
- Ratho. (2011). Things to do. Retrieved from <http://www.eica-ratho.com/content/things-to-do-/2423/>
- Ritzer, G. (1993). The McDonaldization of society. Thousand Oaks, CA: Pine Forge Press.
- Warde, A. (2002). Changing conceptions of consumption. In A. Anderson, K. Meethan, & S. Miles (Eds), The changing consumer (pp. 10-24.). London: Routledge.
- Xscape. (2011). Home. <http://xscape.co.uk/braehead>

意見交換

- ・都市の中に取り入れようとする、何か異なってくる。ロープラインが「遊ぶ」ではなく、「教育」となった時どう思いますか。
- ・必ずキャンプファイヤーが入っていたりする。地域のノウハウを伝えられる教育指導が出来てない。親は、イメージが付きやすい方を選ぶだろうし、上手くサイクルが回っていない。
- ・興味を持ってもらうためには、本来の冒険ではない事を知ってもらった上でしてもらえば良いと思う。釣りと言うとブラックバス問題を引き起こしたという汚点がある。影響を伝えておくことはとても大切だと思う。
- ・提灯一つもって、山の中を歩くだけでも冒険。地域ごとの色をだせるのが、ベスト。
- ・だけど、提灯一つもって歩くというアクティビティは地味。

・地域ごとのノウハウといっておきながら、指導教育になると統一された大きな塊での思考になっているように思う。

サイモン） ハイリスクは、いい事だとアメリカ人は言う。そこにパラドクスがある。参加者は脅されて怖がっているが、指導者は安全であることを知っている。何を達成できたというのだろうか。そして、達成した何を応用できるというのだろうか。



佐々木） 人間とは遊ぶものであるとホイジンガが言っている。その「遊ぶ」は、4つに分けられる。競争、偶然、模倣、めまい。冒険の要素は、「めまい」

の部分だと思う。子供たちが「自分たちでした」ということが大事だと思う。

・冒険は、内発的なもの。沢山の人たちを受けてはできない。つまり、学校教育では難しい。小規模だからできることであり、商業的なこととは馴染まない。

サイモン） リーダーシップを学びにグリーンランドへ行くというと、隣のペンキ塗りでも学べるのではないかと問われる。

・提供者によって、冒険の種類が異なっていて当然であり、沢山の種類があればいい。

・日常の中に冒険はあり、冒険心は地域社会の中で育むことができると思う。

・失敗してもいい場が少ないと思う。刃物も炎も、危ないから生活の場からオール電化とかで離されている。子供の頃の体験が大切になる。しかし、その機会を持ちにくい人たちもいる。

佐々木） いま、それを体験できるように必要となる知恵、方法が消えつつある。80～90歳の人たちから伝承していくことが早急に必要な。

・エンターテインメント性の多い所へ参加者が増えている。用意していないワクワクは地味だから、どのように伝えていくべきだろうかと思う。

2日目24日の昼食時間帯には、約60人の参加者が7つのグループに分かれて、昼食を取りながらの意見交換をしました。その一部を報告します。

①子どもにPBEを

小さい子の方が自由だし、PBEがしやすいのでは。

サイモンさんは、子供は大人よりオープンマインドで好奇心があふれていてなんでも吸収できる。とらわれない考え方をしている。だから色々なこと吸収できる。PBEは子どもの方がいいと話されました。僕は、子どもに何かを教えるというよりも大人が子どもから学ぶことがたくさんあるんじゃないかと思いました。

②グローバルな人材育成を

地域での色々な活動が世界とどうつながっていくのか話しました。「場」というのは一つの集落など、限られたものだけをイメージするのではなくて実は世界全体だ、というイメージをを広げていくのが大切なのではという話がありました。PBEでは、住民の自治性が非常に大切なのでは

ないか。市民意識、シティズンシップが重要で、世界的な問題と絡めるとグローバルシティズンシップと言われるものが今後ますます重要になっていくのではないか。



③自然や文化の多様性と言語

アンバさんが「このシンポジウム自身が私たちの将来に対する保険そのものだね」と、ぼろっと話されたのが印象的でした。

面白いと思ったのは、言語と、生活環境や自然環境は密接につながっているという点です。自然が失われることで自然の中から生まれた言葉自体が失われてしまっている。言語を守るためには、その周りにあった自然というのを守らないといけない。言語と環境、自然というのはつながっているという話が印象に残りました。



④事例の共有を

いまの学校教育は、教科書中心で、学ぶものありきではじまっている。その目指すもの、点数の先、テストの先、教科書の先が、日常生活とつながっていない。

生物の多様性と同様に、中山間地域のある村がなくなったらそれはそれでいいのか。どの村もどの人も決して無駄な存在はないのではないか。「場」というのが多様性を生むことになっているのではないかと思います。

た。

PBEの良い事例が生まれつつあると思う。それを束ねてそれが本当にいい教育をしているんだよということを知らせる。国に知らせる、周辺地域に知らせる。事例を集めて共有しあって学校教育を変えていく、そういう流れを生み出す必要があるのかなと考えました。

⑤高校が地域づくりに参画する

地域に根ざすと言いながら自分の地域で自分が必要とされていると感じたことが無い。逆に、地域おこしに行っ

たときに自分が必要とされている。そこを離れる時に離れなくなってきたというような意見がありました。

高校で地域に根差した学習をしたいという先生がいました。岡山県では地域おこし協力隊の方が常駐しているような高校が出てきて、高校の学習と地域作りを一緒にやろうとい

うことが行われています。これを都市部でもやりたい。高校も、「場」という意味で一つのホットスポットではないかと思います。

⑥社会変革の実体験を子どもに

ルースさんの生徒が作った環境の絵本が紹介されました。すばらしいクオリティーです。高校生が、小学生とか小さな子供たちに環境問題を伝えるための絵本だそうです。人に伝える事で、自分が社会にインパクトを与えられるという実感を得る。達成感を持てるかが重要な

んじゃないか。社会変革そのものの実体験を子供たちが出来る場が必要なんじゃないか。

⑦PBEの明確化を

温暖化といわれても実感できる問題ではなくて、学校教育によって大変な

問題だと理解できる。Place-Un-based Educationも意味はないわけではない。PBEは、子どもに与えようと決めた情報から抜け落ちたモノを身の回りの一次情報に触れることによって拾う。そういう意味はある。「知っている」から、どう行動に移すかという事と、点でしかない行動をどう面に広げていくかという課題。そのためにはPBEとは何か。PBEの基礎的なところを明確にする必要があると思います。

Chapter 2

パネル討論

Discussions

January 24, Sunday

10:10	論点整理 安藤聡彦・埼玉大学教授	Points of Concerns Prof. ANDO Toshihiko
10:40	パネル討論	Panel Discussion
12:20	昼食 ランチディスカッション	Lunch Discussion
14:00	まとめの会議	Concluding Session
16:00	閉会	Closed

論点整理

いま、PBE に問われるもの

安藤聡彦 埼玉大学教授



環境教育の父といわれる英国のパトリック・ゲディスの研究を出発点に、日本の公害教育、環境教育の流れを追う。埼玉県所沢市の森林保全を図る「公益財団法人トトロのふるさと基金」の代表理事も勤める。

本日の議論に先立って、問題提起をさせていただきたいと思います。

本シンポジウムのテーマは、「場の教育；知っているから行動へ」です。

私たちは「前進」しているのか

このようなテーマが採用されるきっかけは企画委員会での議論でした。委員のひとりである日本自然保護協会の横山さんから次のような意見がなされたのです。「自然保護の研究は進んでいるし、自然保護協会の職員一人ひとりの力量も高まっている。けれども全体としてみると、日本の自然保護の力というものは弱っているのではないか。辺野古の問題をはじめ、様々な難しい問題があるのだけれど、それをきちんと解決するような形で動けない現状があるのではないかと」。

企画委員は、それぞれフィールドも違いますし、研究者だったり、実践者だったり、様々なのですが、みんながその横山さんの発言に共感したのですね。たしかにその通りだ、と。

私たちは環境問題についてかなり多くのことが分かっているのだけれども、分かっているからといって、状況が改善されているかと言うと、むしろそうになってなくて、むしろじりじり後退しているような、そういう感じがする。そのことをどういう風に考えたらいいか。それはどこかで私たちが学習とか教育を「知っている止まり」で考えていて、もう少し踏み出して「行動する」というところまで視野に入れて議論できていないということなのではないか。

以上を整理すれば、環境問題に対する研究や知見はかなり蓄積されている。けれども、日本社会で、インドで、イギリスで、シンガポールで、環境保全の力がそれにとまって、強まって、前進しているだろうか？あるいは、環境教育に対する知見や研究もずいぶん蓄積されてきて

いる。けれど、環境教育というものが持っている現状変革性というものが、あまり機能していないのではないかと。むしろ環境教育というものの位置づけがどんどん相対的に低くなっている。本当は現状を変革できるはずなのに、実はそう成り得ていないような状況がありはしないだろうか。

昨日の阿部先生の挨拶でもありましたように、持続不可能な社会と教育とが悪循環している。本当は教育と、持続可能な社会に至る道というのが、いい形で循環する、繋がっていく。我々はそうあるべきと考えているのですが、むしろ逆に持続不可能な社会に向かう動きと、それと連動するような教育の動きというのが、悪循環している。世界の中でその悪循環が我々のほうにどんどん近づいている。あるいは我々はそれに対して、なかなか抗えない。そういう状況があるのではないかと。

場所から離れる現代社会

教育が巻き込まれているのは、パウロ・フレイレ (Paulo Freire) 的な表現を用いれば「銀行型教育」(banking concept of education) ということでしょう。知識を詰め込むだけの注入型の支配的な教育のことです。これはそもそも教育の脱場所化 (de-placement) ということができるでしょう。

同時に現代社会のあり方そのものが人々の没場所性 (placelessness) を強化するような形で展開している。

ビームズ先生のお話の中でリスク社会 (risk society) ですとかリキッドモダニティ (liquid modernity) という概念によって現代社会を捉えるという問題提起がありました。現代社会の支配的な動向のひとつは人々がグローバルなレベルでどんどん移動するようになっていることでしょう。場所に根ざすどころか、むしろ脱場所化の傾向が社会全体で強まっています。

去年1年間のニュースの中で多かった言葉は、「難民」

と言う言葉ではないでしょうか。シリアから莫大な数の人々がトルコを通過してドイツに向かっていく。日本では、福島の方が住めないと行ってどんどん外に出ていく。根ざすどころか、むしろ追われ、場所から出て行く。脱場所化の力がすごく強くなってきている。ディアスポラと言われているような人々も非常に増えている。このような教育と社会における脱場所化の進行を私たち「場の教育」(PBE)に関心を持ち、取り組もうとしている人間たちはどう考えていけばよいのか。

そのような現状に抗う、抵抗する、あるいはそれを越えていく、には何をすればよいのか。ぜひ海外のゲストの方々も交えて、私たちは自分たちの経験を持ちよって、考えてみる。これが今回のシンポジウムにあたって「知っているから行動へ」というテーマを立てた理由です。

昨日の基調講演と分科会での討論で、どこまで私たちは到達したでしょうか。キーワードをいくつか挙げてみたいと思っています。

例えば、「脱植民地化 (decolonization)」。あるいは、もう一度住み直す {再居住化 (re-inhabitation)}。あるいは、「再発見 (re-discovery)」という言葉が様々な方が使われました。「再発見」についてはジャミールさんも使われましたし、桑子先生もお使いになりましたし、学校教育分科会の中で大森先生も使われました。場所や価値の再発見も Re-discovery です。「コミュニティ」は、言うまでもなく最初から最後まで中心的なキーワードです。同時に昨日のジャミールさんのお話の中にあった「Common property (共有の財産)」も大きなキーワードです。

桑子先生のお話の中で、温泉街の街灯の色をどうするか、デザインをどうするかということが話題になりました。あれも地域の共有資源としての common property です。様々な価値観の異なる者たちが集っての「合意形成」の必要性についても、桑子先生はもとより多くの方々が論じられたのではないかと思います。

そして、最初の阿部先生のご挨拶やジャミールさんのお話でも指摘されましたし、分科会の中で絶えず言われたのは、formal な education と、non-/informal な education の全体を考えることの大切さです。ジャミールさんは、non-formal 教育と言われているものが私たちにとっての formal 教育だと話されました。現在言われている formal 教育と non-/informal 教育の全体をどういう風に考えていくのかを絶えず視野に入れていかなければいけないということなのではないかと思います。

新たな社会ビジョン

昨日の懇親会での最後に阿部先生が「これは社会変革

だ」と語られました。すごく大切な言葉です。社会変革という言葉を使いにくいということであれば、新しい社会のビジョンとそれを求める指向性、ということになるのではないかと考えています。

振り返ってみれば、先人たちは新しい社会を考える時に、同時に新しい人間形成や教育のあり方を考えてきました。

3つの本のことを思い出されるかと思います。

ひとつは、ロバート・オウエン (Robert Owen) が 1813 年に書いた「新社会観 (a new view of society)」。「一致と協働の村」(villages of unity and cooperation) という新しい社会を作る。その時には人間の形成の仕方は、新しくなければいけない。性格形成学院 (institution for the formation of character) というものを作って、そこで全人格的な人間の形成を行う。それは小さい時からやらなければいけないので、当事まだ誰も考えていなかった幼稚園を作り、子どもから成人に至る一貫とした教育の institution を作りながら、一致と協働の村を作っていく。彼は、実際にグラスゴウ近くのニュー・ラナーク (New Lanark) でそれを実践し、彼の後継者達はアメリカに行って様々な形で展開し、新しいコミュニティを作りながら教育を行ってきたという歴史があります。

あるいは、1872 年にイギリス人のジョン・ラスキン (John Ruskin) が書いた「ムネラ・プルウェリス (Munera Pulveris)」という変わった名前の本があります。ラスキンは、お金が中心になって考えられている社会のあり方を問い直さなければいけない。自然と文化こそが最大の価値であると考える社会に、最も発達した資本主義国としてのイギリスは移行しなければいけないと書いています。それを実現するためには、人間の変革が必要である。自然や文化が価値であると考えることが出来る人を育てなければ、そういう社会が実現できない。だから新しい教育をすることが必要なのだということです。この考え方は、19 世紀末から 20 世紀に至るイギリスの環境教育を作り出していく流れの大きな出発点になったと考えることができます。

1915 年にロシアのナデジダ・クルプスカヤ (Nadezhda Krupskaya) が出版した「国民教育と民主主義」(Public Education and Democracy)。これは社会主義社会という人類の新しい理想を実現するためには、社会主義社会の担い手となる全面的に発達した労働者が必要であり、そのための総合技術教育 (politekhнизм) の原理に立つ新しい学校を作ることが不可欠であるということを論じた書物です。

オウエンをはじめとする教育思想史上の大人物たちの

名を挙げ連ねて大げさなことを言っていると思われるかもしれませんが、決してそうは思いません。

新しい社会を作ることと新しい教育を生み出すことのつなぎ方をどういう風にしていくのかということが、私たちに課されている問いであるし、そのことを考えるために、私たちは今ここにいるというと考えています。それを考えるためのパーツとか、部品にあたるものが、様々なキーワードとして出されている。それをどうやって組み立てていくのか、さらにそれをどうやって実現したらいいのかということについて、今日はさらにもう一歩踏み込んで皆さんで話し合いをしたいと考えています。

新たな教育への道筋

このあとは次の3つのテーマについて議論してみたいと考えます。

まず、このPBEの実践の姿を豊かに語り合っていくことが大事なのではないかと思います。Placeとは本当に多様なものです。自然も多様ですし、そこに関わる文化も多様です。そのことによって、Placeというのは、多様な形をとるわけで、そこに根差そうとする教育の姿も様々なバリエーションが出来る。その様々な多様な姿を語り合いながら、私たちは、そこに共通しているものは何なのかということについて考えていく。さらにキーワードを錬磨したり、複数のキーワードをつなげていったりだとかということが大事なのかなと考えています。

2番目は、PBEの全体像の明確化です。通常のformal educationと言われるものと我々の考えているPBEというのは、どういう整合性があるのか、どういう風にふたつのものをつなげて考えていくのか。昨日、参加者最年少の大学一年生岩下君は、学校教育の分科会でこういう発言をされました。「そもそも学校のカリキュラムは決められているので、面倒くさいので、それをぶちこわしたらどうですか?」。すごい意見だなと思いました、ひとつの考えなのかもしれません。今のformal educationというものが大きな形で回転しているその社会の中で、PBEが具体的にどういう形であればいいのか。その組織の仕方やシステム化の方向性、こういうことについてお話ができるとよいと思っています。

3番目は、その全体像が出てきたときに私たちはどうやってそこにアプローチしていったらいいのか。PBEへの移行戦略の具体化です。ここに1冊の本を持ってきました。去年、日本で出された「進化する都市：都市計画運動と市政学への入門」(Cities in Evolution; an Introduction to the Study of Civics and Town-

Planning Movement)です。パトリック・ゲデス(Patrick Geddes)というイギリスの都市計画家が1915年に書いた本です。昨年はその刊行100年ということで、その新しい翻訳ができました。翻訳された西村一朗先生は、これは都市計画や市政学(Civics)の古典としてばかりでなく環境教育の古典としても読めると言っています。ゲデスは、新しい社会を作る中心的な動向としての都市計画運動が新しい都市を作り出しつつある、そしてそれに応じた新しい教育が胎動しつつある、ということを行っています。ゲデスが言っている都市計画運動にあたるもの、つまりPBEに至る移行は、誰がどういう形で導いていくのでしょうか。皆さん、色々なところで色々なことをやっているわけです。それをマクロな目で見てみると、その大きな動きを我々はどういう風に考えていくのか 私たちにはそれが問われています。

以上、なぜ私たちが「知っているから行動へ」というテーマを掲げているのか、昨日の議論の到達点、そして今日お話ししてみたい3つの論点「PBEの実践像の豊饒化」、「PBEの全体像の明確化」、「PBEへの移行戦略の具体化」についてお話ししました。今日の議論が昨日以上に実り多いものとなることを願っています。

ご静聴ありがとうございました。

Challenges of PBE

ANDO Toshihiko, Prof. SAITAMA University

He is conducting research on Environmental Education from various aspects. He is also serving as Chairman of the Board of TOTORO FUND, Saitama Prefecture.

I would like to raise an issue in advance of today's discussion. The theme of today's symposium is "Place-Based Education: From Knowing to Acting". The reason this particular theme was selected is because of a discussion in the Planning Committee.

Mr. Yokoyama, a committee member of the Nature Conservation Society of Japan, gave the following opinion. "Advancements are being made in research on nature preservation, and each member of the Nature Conservation Society is increasing in competence. But overall, it seems as if the power of nature conservation in Japan is weakening. We have various difficult problems, such as the one in Henoko, and in our current situation we are unable to act in such a way as to solve them properly."

The members of the Planning Committee have experience in different fields, with some being researchers, and others practitioners, but all of them were in sympathy with Mr. Yokoyama's comments. "Yes, that's certainly the case," was their response. We understand many things about environmental issues, but if we were to ask ourselves if this understanding has led to improvements, I feel as if we might be compelled to say that not only has it not led to improvements, but we have even regressed somewhat. What are we to think about that?

We've been led to believe that learning and education causes us to stop doing certain things, but we can't talk about these things without taking another step towards "acting." To summarize what I have just said, we have many studies and findings regarding environmental issues. But in Japanese society, and in India, the UK, and Singapore, has there been an accompanying increase in, and progress made with, our ability to preserve the environment? We



have a great deal of findings and research regarding environmental issues. But it seems as though the ability to change our current situation inherent in environmental education is not really working. Instead, the status of environmental education is becoming relatively lower. While we should be able to change our current situation, in actuality we are not there yet.

As Professor Abe noted in his address yesterday, there is a vicious cycle occurring between a society and education that are unsustainable... We like to think that education and the pathway toward a sustainable community should really be connected in a virtuous cycle, but trends headed toward an unsustainable community and accompanying trends in education are part of a vicious cycle. That vicious cycle is becoming ever closer to us, and perhaps we cannot do anything to fight it. Doesn't it seem that way?

Education is invoked here because of, to use an expression coined by Paulo Freire, the banking concept of education. This refers to the dominant form of education where one simply stuffs in as much knowledge as possible. We might call this the de-placement of education.

At the same time, modern society is increasing placelessness among people. In his address, Dr. Beames posed the issue of viewing modern society through the concept of liquid modernity or a risk society. One dominant trend in modern society is that people are becoming increasingly mobile on a global level. Instead of being place-based, there is an increasing trend towards de-placement throughout the

whole of society .

We have heard a great deal about “refugees” in the news of the past year. Vast numbers of people are moving from Syria through Turkey and on their way to Germany. In Japan, the former citizens of Fukushima move elsewhere because they can no longer live there. Far from being place-based, they are compelled to leave their places. This de-placement is becoming very powerful, with the people who belong to what is called a “diaspora” drastically increasing. For those of us that have taken an interest in, and are working on, “place-based education,” or PBE, what are we to think of this de-placement occurring in education and society? What must we do to resist, or move beyond, this trend? We must bring our experiences together, and think. This is why we have chosen “From Knowing to Acting” as the theme of this symposium.

How far did we get in yesterday’s keynote address and session discussions? I would like to mention a few keywords. For example, many people used the words “decolonization,” “re-inhabitation,” which means to live in a place once again, or “re-discovery”. Mr. Jamir was one person who used the word “re-discovery,” as did Professor Kuwako. Re-discovery can apply to places as well as values. It goes without saying that “community” has been an important keyword from start to finish. The phrase “common property” as used yesterday by Mr Jamir is also an important key term.

In Professor Kuwako’s address there was a discussion of what color to make streetlights in a hot spring resort, or what sort of a design these lights should use. These streetlights are an example of common property for that area. Professor Kuwako and many others talked about the need for “consensus building” when bringing together people with differing values.

The importance of thinking holistically about formal and non- or informal education was noted in the first address by Professor Abe and Mr. Jamir, and continually repeated in the sessions. Mr. Jamir stated that non-formal education is, to us, formal education. I believe this means that we must continually keep in view how we think about formal education and non- or informal education overall.

At the end of last night’s round-table conference, Professor Abe stated that, “this is a social revolution”. These are very important words. If we find it hard to use the phrase “social revolution,” then perhaps then perhaps this indicates the need for a vision of a new society and a direction in which to seek it

In retrospect, when our predecessors thought about new societies, they also thought about developing new people and education. This calls to mind three books. The first was written by Robert Owen in 1813, and is entitled “A New View of Society.” In that book a new society with “villages of unity and cooperation” is created. In doing so, there is a need to develop new ways to develop people, so they create an “institution for the formation of character” in order to form humans with a complete character. This must be done when they are small children, so the people then form nurseries, which no one up to that time had thought of, creating institutions that, provide a coherent education from childhood to adulthood, as well as villages of unity and cooperation. Owen put these concepts into practice in the community of New Lanark near Glasgow, Scotland. His successors went to the US and developed these concepts in various forms, leaving behind a legacy of creating communities while providing education.

Another book is the strangely titled “Munera Pulveris”, which was written by John Ruskin in 1872. Ruskin asserted that we must question a society with money at its core. Ruskin believed that nature and culture were the highest values, and that England, being the most advanced capitalistic country, needed to transition towards them. Realizing his vision requires a change in people; Ruskin’s society cannot exist unless people can be brought up to believe that nature and culture are valuable, and that means a new type of education. Ruskin’s philosophy can be viewed as a major starting point for the environmental education in England from the end of the 19th to the 20th century.

In 1915 Russia’s Nadezhda Krupskaya published a volume entitled “Public Education and Democracy,” wherein she emphasized that realizing socialism in the human race would require laborers to develop in all areas needed to support socialism, and

that new schools built on the principle of politekhnizm, or general technical education must be created.

Some may think I am exaggerating in mentioning the names of the great minds of educational philosophy, such as Owen, but I don't think so. We have been given the challenge of how best to tie the creation of a new society to the creation of new education. In thinking about this, we must remember the place where we are. Various keywords are given to us that act as the parts and items we need to consider this idea. I would like to take our discussion one step further today, and talk with you about how we can assemble this education, and moreover how we can bring it to fruition.

I would like to discuss three themes.

First, I believe it is important for us to have abundant discussions about how PBE is being practiced. Place is a very diverse notion. Nature is also diverse, as are the cultures that touch nature. Place can take many forms depending on culture and nature, and education that is rooted in them also has many variations. In our discussion of these diverse and various forms, we begin to ponder what all these things have in common. I think it may be important to learn more keywords, and start to tie these keywords together.

Second is the clarification of the overall image of PBE. What is the level of consistency between what we call normal formal education and PBE, and how should we think about these two together? Yesterday, a first-year student named Iwashita, who is also our youngest participant, made a comment in the session on school education. He said, "The school curriculum is set in its ways, and it's bothersome, so why don't we destroy it?" I thought that was quite a bold statement to make, but perhaps it is one way of thinking. In a society where today's formal education is turning in a major way, what form should PBE take? I think we need to be able to talk about the methods of the organization and the direction of systematization.

Third, what kind of approach should we take when we can see the big picture? This will require more closely defining transition strategies to PBE. I have brought with me one book on this topic, the book published last year in Japan entitled "Cities in

Evolution; an Introduction to the Study of Civics and Town-Planning Movement." It was written in 1915 by an English urban planner named Patrick Geddes. Last year was the 100th anniversary of its publication, which resulted in a new translation here in Japan. The translator, Professor Ichiro Nishimura, says that this book can be read not only as a bible of urban planning and civics, but also as a bible of environmental education.

Geddes says in his book that the town-planning movement, as the central force in creating a new society, is in the process of creating new cities and that in response a new education is in its infancy. So who will take the lead in the town-planning movement noted by Geddes, namely the transition to PBE, and how will they do it?

We are all doing various things in various places. From a macro perspective, we are being asked what we think about this major movement. I have touched on the reason why we chose "From Knowing to Acting" as a theme, the conclusions of yesterday's discussions, and the three discussion points for today: "bringing to fruition the practical image of PBE," "clarification of the overall image of PBE," and "specific strategies for transitioning to PBE." It is my wish that today's discussion be even more fruitful than those of yesterday. Thank you for your attention.

＝ パネルディスカッション

パネルディスカッション

パネリスト

アンバ・ジャミールさん
サイモン・ビームズさん
ルース・オン・ウェイ・リンさん
阿部治さん
横山隆一さん

モデレーター

安藤聡彦さん



安藤

昨日の振り返りと感想、の中で何が大事なのか、何を考えたいかということで発言をお願いします。

点から面へ、担い手と繋ぎ手

横山

昨日の自然保護の分科会では、3つの場所での活動が話題になりました。

所沢にあるトトロの森。市民がトラストによって手を入れ、所沢市の里山保全地域になっている。細い沢沿い作られた段々の田んぼである「谷戸田」の再生をしている。二つ目は、滋賀県の甲賀とある「信楽の里」。有機農法を研究するNPOの方々が、研究と実践をしている。三つ目は、千葉県三芳村で早稲田大学のサークルがやっている、子どもとの田んぼ作りの実践でした。

すでに行動している人たちの話は大変興味深かったです。但し、その広がりというか、実践というのは、



日本地図で見れば点なのです。「点」の環境で、活動をやると思った人たちがやっているだけなのです。第二のトトロの森が日本の中のどこで準備されているか。第二の「信楽の里」も日本の社会のシステムとして増やしていこうと思っているか。田んぼ作りも三芳村と同じことをやっている人はたくさんいる

と思うのですが、教育の、あるいは環境管理のネットワークとして、その人たちが今回のような集まりを定期的にもっているだろうか。

「知っているから行動へ」ということを実践し、社会の中で定着させていくためには、実際にやる人（担い手）と、それをorganizeする人（つなぎ手）を生産するシステムというものを社会の中に作っていかなければいけないのではないかと話しました。その具体的な方法な何

か。そういう段階に持ち上がったのではないかなと私はかなり期待していました。

自治力の減衰

阿部

「自治力の減衰」がすごく気になっています。昨日の「地域の再発見」の分科会では、岡山市、松本市の公民館の話がありました。戦後日本ではすべての地域に公民館が存在し、そこが戦後日本社会の民主主義の担い手を育てていくのだとなっていた。その中でformal、informal全部兼ね備えた形での地域の人づくりをやっていた。地域に根ざした教育をやっていた。

しかしそれは、今、公民館が行政の中でどんどん減らされている。しっかりと残っているところが、岡山であり、松本であり、飯田です。そこではちゃんとPBEをやっている。地域を担う、自治を担う、人作りがなされている。「知識はたまっていくが、行動が出ない」ということは、一人ひとりが、社会に働きかけていく力を失ってきているのだろう。それは自治の減衰にあるのではないかな。私たち自身の中に問題があるのと同時に、何らかの形でもっと大きな動きの中に取り込まれていってしまっている。PBEの社会性の問題、つまり「責任」をここで議論に加えてほしいと思います。

安藤 自治 Autonomy と Responsibility。これが重要なのではないかとのことでした。

ルース

シンガポールの規制、行政は、生態系やそこに住んでいる人のことへの配慮がありません。桑子さんが話されたような住民間の合意なしに、移転計画を進めています。まさに場の教育がいま必要なのです。その場所、歴史、他の人々との関係を作り直す。それが重要だと思います。

もうひとつは、教員への働きかけです。より情熱を持って活動してくれ、さらにその輪を広げてくれるよう、働

き掛けるべきだと思います。

自分たちの場への愛を子どもたちに持ってもらうことが大事だと思います。若者たちにとっては、お金と自己満足というものが人生の目標で、自分の欲を満たせるようになるために勉強をしています。その気持ちを、自分の国、その場所に対する愛というものに切り替えることが大切ではないでしょうか。自分が何者かであることが分れば、そこから行動が始まります。隣の人が困っていればそれを助けることができるより良い人になれるのだと思います。

安藤 回復、土地への愛、そしてそれを繋ぐ教師の情熱というお話をいただきました。

サイモン

冒険活動、環境教育、持続可能性教育、地域活性化など多彩な活動をしている多くの方と話をさせてもらいました。みなさん別々のことをしておられますが、場の教育（PBE）や「場と関わり合う教育（Place Responsive Education, PRE）」というものの本質部分でつながっていると感じました。



アンバさんが紹介された伝統知にあふれる農民の話も印象的でした。すべてはその場から学ぶことができます。世界は生態系と一人ひとりの物語であふれていると感じます。

PBE のネットワーク作りを

大切なのは、実践者たちのネットワークではないでしょうか。この場のような人のつながりです。スコットランドでは、野外教育者たちのネットワークがあります。メールで、ブログで、スコットランド中の出来事を議論しています。自分の地域でPBEに関心を持つ人間は自分一人であると感じても、そんなことはありません。仲間とつながりあって進めばいいのです。

大企業による思考と行動の支配

最後に、あまり議論してこなかった点に触れます。日本のみなさんの悪口をいうつもりではありません。多国籍企業についてです。昨今の状況は不平等の広がりです。今朝、お昼ご飯を持ってくるようにということでセブンイレブンに寄りました。店員たちは、その商品からも買い物をしてくれる人たちともまったくつながりはなくて、ただ機械のように動いています。持続可能性とは縁遠い世界です。過剰に包装されたものを、さらに一つ



ひとつレジ袋に入れてくれます。ただ安いもの、便利なものを求めているのは、PBEが追い求めるものなど夢のまた夢。経済だけに追われていては大変なことになります。

決して新しいことではありません。安藤さんは3冊の本を示されました。200年近く前に書かれた本もありました。しかし200年前には、なかった巨大な世界企業がいま、私たちの思考や行動を支配しているのです。

安藤 価値の優先順位をつけることの大切さ。そして担い手のネットワークの重要性についてお話いただきました。

アンバ

昨日からの討議を聞いていて、日本で若い世代が、関心を持ち、理解をし、喜んで学ぼうとしていると感じました。学びの手法、対象を深める中でとてもいい予兆だと感じました。

サイモンさんがいう大企業の問題も、私たちのグループで議論になりました。大企業は、何をしているか。企業の社会的責任（CSR）に関する活動だけしている訳ではありません。なぜ、伝統的な社会の知の体系や実践例のためにもっとお金や技術を出してはくれないのでしょうか。

教育を市民の手に

その教育がフォーマルかノンフォーマルかは関係がないと思います。教育全体が課題なのです。私たちは教育のシステムに過大な期待をしていないでしょうか。自分たちの道徳観、価値観に基づいた教育を自分たちの手に取り戻してもいいのではないのでしょうか。そんなことを考えています。今は私個人の考えですが、そういう個人個人の考えが隣人のそしてコミュニティの考えとなり、より大きな国家のビジョンになっていくのだと思います。

昨日、ものごとは小さく始めることが大事だといいま

した。火を付けるには火花が必要です。この場にいるみなさんが火花です。ここから自分たちが大事だと思うことが実現させる大きな炎を始めることが出来るのだと思います。

安藤

質問をいただいています。最初はルースさんに。非常に都市化が進んでいるシンガポールと日本の共通性を感じました。PBEは都市の子ども達になぜ必要なのでしょう？子どもたちにとって大事な学びとは何なのか？お考えをお聞かせください。

ルース

都市であれ田舎であれ、だれもが自分は何者であるかを知る必要があると思います。確かに東京にもシンガポールにも自然はそんなにありません。ならば、自然を呼び寄せるか、自然に出かけていくかです。

都市部での PBE

技術であふれる都会の高層ビルで、隣人とも切り離されている都市の子どもにこそ PBE は重要です。PBE は自然だけでなく友を愛し仲間と一緒にいるためにも重要だからです。

シンガポールでは、人工の自然が導入されています。運河だった場所を川のように作り替えて人々が自然に近づくことができるようにする、学校や家族単位で自然の中に行くプログラムを用意するなどの事業が行われています。

サイモン

ひと言、言わせてください。

都市と田舎を二分する考えには、注意が必要です。

場所は、場所なのです。都市の真ん中にあるからといって自然がないわけではありません。都市の中にも、豊かな生態系があり社会的なつながりがあります。そのためにはよくみないといけないかもしれません。でも、ちゃんとあるのです。歴史であり、地理であり、数学であり、するのです。教科外の学びという視点からすると、都心部というものは、学びの素材にあふれているのです。

まず自らの場を知る

自分の場所を知ることが、まず必要です。そこが出発点です。都市であろうとなかろうと、自分の場所を知ることが必要なのです。都市も田舎も、どちらも大切なのです。

横山

自然の世界では、都市生態系というか、人と人の人工

物とセットになった自然性というのがあります。東京も例えば六本木ヒルズの回りを歩くと、表通りはニューヨークのように見えますが、裏通りに入ると小さな水路がたくさんあって、二階屋がたくさん並んでいるような昔の東京がそのまま残っている。そういうところに東京のもともと自然があり、生きものも頑張って生きています。日本自然保護協会の事務所は、昔は半蔵門のビルの中にあったのですが、近くに皇居とイギリス大使館があって、例えばコカブトムシという、今ではとても珍しい生きものになってしまった虫が、コンビニの灯の下に落ちているのです。

安藤

サイモンさんやアンバさんは、新潟県南魚沼市で地域の皆さんと意見交換されたそうなので、その感想をお聞かせいただけたらと思います。

アンバ

ちょっと見せてもらっただけでコメントするのは難しいですが、おコメを作るプロジェクトなどにどのようにコミュニティが関わっているのかは勉強になりました。

前回、新潟を訪ねた時に見たのは、子どもたちがわらじを作っていました。単に技を教えるだけではなく、それを通じて、自然を正しく感じ、人の行為が自然にどのような影響を与えるかというようなことも教えるのだと思います。こういうことは、インドに持ち帰りたいことです。

サイモン

私は、PBE は学校教育の中ではそんなに組み込まれておらず、放課後や週末に行われている NPO などに任されているように感じました。残念ながらその NPO たちはあまりお金も人材もなく、学校教育や入試の世界と比べて大事されていないように見えました。

学校での PBE を

すべての小中学校で、先生たちがそれぞれちょっとだけでも PBE について取り組めば、全体としてはとても大きなことになると思います。学校の外で頑張っている人を知っているのでこういうことをいうのはいやなのですが、それでも学校の中での変化というのは社会に高く受け止められるのです。なので、学校の変化に期待した



いのです。

安藤 サイモンさんが基調講演で話された、学びの「第三段階」。その場での学びをグローバル社会の他者へのつなぐ繋ぎ方について、もう少し具体的にお話いただけるでしょうか？

サイモン

まず、この第三段階は、その場を知る、その場を変えるという2つの段階の上にあることを再確認したいです。そこで、問題は、私たちの場所で起きることはセブンイレブンではないですが、世界の大きな力によって影響を受けているということです。

PBEのこの2つの段階に達したら、次は私たちとは別の場所にいる、別の考えを持っているかも知れない人たちとつながる時です。これは10年前は不可能でしたが、いまでは技術のおかげで出来るようになりました。wikiやSkypeやウェブといったオンラインメディアを使って、ときには教室と教室をつないだやりとりも出来るようになっていきます。

ただ、まだこれは新しいことなので、世界中の何千という学校でやっていることではありません。英国やカナダでもPBEの第1段階はまだ広がってはいません。まだPBEは始まったばかりなのです。

安藤 今のお答え、ぜひ具体的な形で皆さんと一緒に考えていくことができるといいなと思いました。

最後の質問は、絶えず移動する社会の中で、場所について責任を持つということをもどのように考えたらいいのかということです。人間はどんどん移動している。ある場所で暮らす期間が、数カ月だとか数年というようなこともある。その中でその場所に責任を持つ、その場所とどう関係するか。この流動化する社会の中でPBEのあり方を考えていくことがとても大事なことだと思います。

その場とのつながり

横山

私が自然保護の仕事として1日でも2日でも関わったところは日本の中に200カ所ぐらいあると思います。その方々との連絡を絶やさないということだけで、毎年あたふたしています。

自分が行ったことがある場所、関わりを持ったことのある場所にどんな責任を感じるだろうか。その場に対する強い責任は、その場に住んでいる方々が持たれていて、私にはその方々からの何かSOSが突然入ってくる。それに対して、全く知らない方々からくるSOSよりも、とても近い感じがして、それに応える義務が自分には

あるのではないかと思うところがあります。

ちょっとでも関わりのあった土地や人だけではなく、生きものや景観、景色、何かの出来事。そういう出会いが自分を作ってくれた、あるいは教育してくれている。それに対する責務とか責任を感じることがあります。絶えず人が移動して住んでいる場所が色々になったとしても、そこに関わるつながりが出来ると、時間的に長いとか短いとかに無関係な関係が生まれるのではないかなと私は思っています。

子ども時代の Sense of Place

阿部

横山さんが話されたことにとても共感しています。私たちどこに住んでいてもその場の感覚 (Sense of Place) を持っているわけです。その Sense of Place は、どこで身に付くのだろうか？私は子ども時代だと思っています。例えばデイヴィッド・ソベルが、幼児期の7歳ぐらいの時代に自然としっかり触れることが、自然嫌い (エコフォビア) ではなくて、自然を愛する (エコフェリア) 気持ちを育てると言っています。子ども時代にしっかりとその場の感覚を身に付ける。その感覚を身に付けた人はどこに行っても、移動先の場を見るセンスがある。技能が身に付いている。

大事なことは、子ども時代に Sense of Place をどう身に付けるかということ。自然との関わりだけでなく、人と、あるいは地域との関わりがすごく大事なのではないかと思います。私自身もそのように育ったと思います。

もうひとつはグローバルという地球というセンスが必要なのだと思います。どこに移動しようが、地球で暮らしているというセンスを持たなければいけないだろうと。PBEで言っているローカルなコミュニティのセンスだけではなくて、グローバルなセンスというのが、共通してあり得ると思います。

グローバルなセンスと言った時に、3つのことがあると思っています。ひとつは、人と自然の関係との問題。



もうひとつは、自分自身と他者との関係。同世代の人々との関係。最後は、次世代との関係。この3つの感覚、意識。どこに移動しようが、私たちに備わっていないといけない感覚だと思います。

子ども時代に Sense of Place。これは人なり自然なり場なり、そういったものとの関わりで身に付けるもの。それはどこに行っても変わらずそれはひとつの窓として、その地域の移動先のものごとを理解する力になると思います。もうひとつグローバルなセンスと言うのは、どこでも必要だろうというこの2つだと思っています。

ルース

阿部さんのおっしゃる通りです。特にシンガポールでは、外国からの移民労働者が多くいます。差別といわないまでも、外国人への嫌悪感というようなものがあります。

シンガポールのために働きに来てくれるこのような人たちに、場とのつながりを感じて欲しいと思っています。そこであるプロジェクトでは、生徒たちがその移民労働者の若者と一緒に、高齢者住宅のお手伝いをしています。外国人たちには、地域のことを理解し、その手伝いをすることで地域の一部になれると感じてもらいます。生徒たちは地域のことを学びながら、インドネシアやタイからの移民のつながりを強めていきます。

学校で働いている移民労働者たちとスポーツイベントをすることもあります。移民たちにとって一時の滞在場所でしかない私たちの学校とのつながりを持ってもらいたいからです。

テクノロジーを味方に付ける

サイモン

昨日は、テクノロジーが人々を疎外すると話しました。通勤の際に、バスの社会や路上で、人々はイヤホンをして画面に見入っています。そばの人など気にかけていません。ただ、別のいい面もあります。2010年に書かれた「モバイルライフ (Mobile Lives 9)」という本があります。そこには、なぜ私たちはこういう移動しながらの生活が必要なのか描かれています。

昨年、ある学会への出張で、泊まる場所が必要になりました。気安い方法は、チェーンのホリデイインを捜して、スターバックスでコーヒーを飲むことです。しかしこれはまったく場とその文化を無視した行為です。

そこで、インターネットです。Airbnbを使って、離婚して一人暮らしの男性の家に泊まりました。地元の食材を使った素晴らしい朝ご飯を出してもらいました。近所で評判の自家焙煎カフェを紹介してもらい、どこで取れたかまで分る豆を使ったコーヒーを飲むことができました。

こういう非商業的な場所を探すことが可能になりました。グローバル化した世界で一個人がこういう選択ができるのです。自分が支えたいと思うものを捜すことができるのです。日本でならエコプラスがやっている南魚沼のおコメを買うことも出来る。しかし、セブンイレブンに行くと、どこのだれがどこで作ったかわからない、自然からも文化からも、場そのものからも切り離されたコメを買うことも出来るのです。

旅先の「場」とつながる

アンバ

私も、仕事で旅を多くしています。旅先の場所をどのように見るか。自分の場所と比べて、似ているものはないか、を捜します。匂いや見かけ、天気や、皿、人々の着物、生えている木々、さらにはだれかが竹を割っているその方法。似たものを捜すことはいい出発点になると思います。

だれか地元の人と一緒にいれば、さらにつながりというものを作ることができます。そのコミュニティの人たちと議論させてもらったりしながら、その場所と自分の場所と歴史や文化、価値観、暮らし方などのつながりを感じていくのです。違う場所や地域の人々同士の対話が社会の変革につながることをすれば、この対話はPBEのひとつの事例ということになると思います。

会場から質問

関口

中高一貫校で生物の教員をしています。私は今回「知っているから行動へ」というタイトルに魅力を感じました。昨年末にボルネオに生徒を連れていきました。パーム油を使うことによってアブラヤシのプランテーションが増えている知識は、教科書などで日本でも学ぶことができます。でも知ったから、どう行動するということはなかなか出来ません。実際にボルネオに行くと、プランテーションが地平線まで広がる場所を見ると、生徒達も何かやらなければならないと思ったらしく、シンポジウムに行ってみようとか、これをどうやって広めていこうかという行動に変わってきました。知っているが行動に変わるためには、まずひとつ体験をすることが大事で、体験から何らかの感情を得て、最終的に行動につながるのかなと思っています。壇上の皆さんそれぞれが、どうして環境活動、場の教育、地域とつなげる活動をしているのか？そのきっかけとなった体験は何なのかお聞きしたいです。



体験から始まる

サイモン

直接的な体験ですね。まさにそれがPBEのもっとも大切な部分だと思います。すべての感覚、感動、発見、そういったものがすべて学びにつながっていきます。情念というようなものも含まれます。

阿部さんが触れたソベルの有名な言葉があります。10年も前に彼はこんなことを言っています。「子どもたちは森の保護などということを心配する前に森でたっぷり遊ぶべきだ」と。私たちはまず関係性を持つべきなのです。大事な点は、だからといって生徒全員をボルネオまで飛行機で連れていくわけにはいかないということです。世界のさまざまな危機を教えるために世界中に行くわけには行かない。なので、家の近くで見ることができる課題を探すのです。

横山

私は、母の育った新潟県の長岡に、幼稚園ぐらいの時に連れて行かれて、そこで日本の健全な農村の中で生きている人たちに育てられました。その農村の風土というのが私の原体験で、その時の教育者は母とおじです。その次に小中学生の時代に生物をじっと見ることを教えてくれた人がいました。鳥を見ることを趣味している大学生に基礎体験、例えば朝から夕方まで望遠鏡で鳥の暮らしをじっと見るという体験をさせてもらいました。そして決定的だったのは高校の教員との出会いです。情熱的な自然保護を語る人で野外に生徒達を何度でも連れていく人でした。この原体験と基礎体験と高校の生物教育の3つが私をこの職業に向かわせたとても大きな出来事でした。

阿部

私の場合は、父親が、非常に自然が好きで、一緒に裏山にしょっちゅう行っていました。家の屋根裏にはムササビがずっといました。冬は裏山にフクロウがいました。小学校5年生の時に、集落にスキー場ができました。そのおかげで父や村人たちは出稼ぎをせずにすむようになり、家は民宿を始め、経済的に豊かになりました。

ところが、木を切ってスキー場が出来たため、フクロウやムササビはいなくなりました。私は子どもながらに環境と開発の問題にジレンマを感じていました。大学の進学を考えた時に環境がブームになってきた時代もあって、自然保護を志しました。野生動物を守りたい。その延長線上に環境教育があり、さらにその延長線上に子ども時代の思いがあって、ESDを提唱し進めてきました。ということで私の場合は子ども時代の経験です。

そこで培った Sense of place がPBE そのもので育っ

たと思っています。だからこそ、子ども時代にそういう感覚を身に付けることに価値があると思っています。

人生での重要な体験（SLE）

高野

Significant Life Experiences (SLE) という調査を総称する言葉があります。

人生にとって重要な体験研究です。今の環境問題に取り組んでいる人たち、かなり熱心にやっている人たちにインタビューをして、その調査結果を分析したのが、最初の研究の始まりになっています。その結果、圧倒的に幼少時のポジティブな環境体験が、今のそれぞれの人の真剣な環境活動につながっているというのが最初の研究でした。そこからどんどん派生して行って、大分長い調査なので、いろいろな方がやっているのですが、文化を越えてどんなのかとか、いろいろな研究があり、最近では若い人達が熱心にそういったものに取り組んでいる人の原点は幼少期よりもう少し青春期になってきた時のネガティブな環境的な体験が多いという調査があるので、ぜひ参考されてみたらどうでしょうか。

昨日の大森さんのお話にありましたが、人を動かすのは、情意というか、情動というか、それを生み出すのは体験であるということは教育理論の中でも言われていますので、実践の大切さというのは、揺るぎのないものだと思います。

豊田

いろいろな環境関係の集まりに参加する中で一番面白かったというのが素直な実感です。それはもちろん自分がずっと考え続けていた事を皆さんと同じ関心で共有できたという事が大きい。どうしても環境の事を考える時は、関心がある人だけで語る。ここに出てこない人たち、あまり関心がない、そんなことに意味はないと思っている人たちとの意見交換の場も面白いと思いました。合意形成の専門家なので色んな声を聴いてみたいとい



う気がしました。

佐久間

年々若い方の出席が多くて大変心強く思っています。私の場合は自然保護運動を45年以上やってきています。桑子先生から合意形成についての話を聞きました。色んな方々が同じ視点に立つ、同じレベルで壇上にあがるから合意形成がなされるのであって、今の日本の特に環境問題について、相手側が理不尽にもそういうテーブルにあがってこない状況が多々ある。次回以降その辺の視点を含めたシンポジウムを開催出来たらうれしいなと思います。

経済を語ろう

佐々木

課題としてずっと頭の中にあるのが、安藤先生が午前中に紹介されたラスキンの、お金を中心という価値観から自然とか文化を中心にする価値観にシフトしていかねばだめだということです。ESDも環境問題も、さかのぼればグローバル経済が引き起こした課題です。今回はグローバルな経済、ESDあと価値観、行動とかを議論でできればいいのかなと。どうしても世の中の問題は経済。期限切れの食材を横流しする、そういう人たちが多いと、私たちが目指している社会に行きつかないと感じます。

木俣

都市の視点が多くて自然とか農山村とかのそちらからの視点が少ないと感じました。自然とどう付き合うかという伝統的な知恵や技能を今私たちが継承しないと高齢者の方々は亡くなってしまいます。90歳ぐらいの人でないとそういう技能を持っていません。緊急の課題だと思います。

環境と教育を考えた先人たち

学ぶということは内発的、個人的なものです。家族とか地域社会が身近な場所で地道にコツコツやることだと思います。ラスキン、トルストイ、ガンジー、ソーとか、日本の安藤昌益、江渡狄嶺、宮沢健二、三沢勝衛など、優れた「環境プラス教育」というのを考えた人がいる。そういう方たちの内村鑑三がいうところの最大遺産というものを受け継いで、私なりの、みなさんなりの最大遺産を残していく。個人主義を徹底したいと思っているところです。

PBE の記録と評価

アンバ

今回、PBE に関しての期待と確信が語られたと思

います。課題としていえば、PBE の評価の仕組みがあるように思います。

地域と地域の連携は出来るだろうと思います。地域とグローバルのつながりをどうするか。さらにそれをどう政策レベルに引き上げていくか。政策のためには科学的な根拠が必要です。それぞれの取り組みをきちんと記録していくことが大切になります。

また、このようなシンポジウムなどを通じて仲間同士で話をするに加えて、その輪をどう広げるかという「コミュニケーション戦略」が大事になる。子どもたちにはPBEを広げられてもその親たちをどう引き込めるか。そこから地域の教育委員会に影響を与え、さらに国レベルに広げる。そういう触媒効果が必要だろうと考えています。



ルース

アンバさんがいうように、大人へのPBEが考えられるのだと思います。PBEの提唱を続けることが必要だと思います。実践者やNGOや地方自治体、さまざまな組織がネットワークされて、PBEの具体化に向かって話し合っていくということが必要だと思います。対話から行動が生まれると思います。

社会を見る必要性

若い学生たちに、社会のギャップを見せることが必要だと思います。社会をよく調べるということです。例えば、シンガポールでは政府が高齢者向けにいろいろな財政支援策を用意している。しかしその申し込みはインターネットだけで受け付けている。高齢者はインターネットに慣れていない。学生たちはそのギャップ見つけて、そこを埋めることが出来るはずです。

もう一点は、教師の役割の多様性です。教師はファシリテーターでありモデレータであり、モデルであり、ときには親のようにもなります。

経験から行動にどう移すことが出来るか。指導者は、学生たちの内面化をどう手助け出来るか、が問われると思います。あることについて価値があると認める、という内面化。これこそが学生のエンパワーメントであり、たとえそれが小さな変化であっても、将来につながるのだと思います。

サイモン

5つの視点を話します。

①ある場所、ある小さなコミュニティでの教育でありながら、同時に地球全体でもある「場」の教育とは、扱いにくく複雑なものだと思います。ここで私たちが取るある行動が、地球の向こう側に影響を及ぼす時代です。

②PBEは、素晴らしいように思えるが、つかみどころがない、ぬるぬるした魚のようでもあります。PBEとは何かを考えるのをやめて、最終的に何を学びたいのか、あるスキルなのか、知識なのか、あるいはリーダーシップなどという社会的な能力なのか。何をgetしたいのかを考えればいいのではないかと。PBEという手法で設定する目標をどう達成するかという発想も出来ると思います。

③不確定な要素を通じての学び、感情をかきたてるような学び、学生に決断する役割を与えての教育、というのは生徒たちにとって簡単なことではありません。そのための技や知識が必要だし、現実の問題でもあるし、自分が慣れ親しんだ地元の課題でもあると思います。

④ブライアン・ワッチョウ (Brian Wattchow) が



2011年に共著で出した「A Pedagogy of Place (場の教育学)」の中で述べている「スローな教育法 (Slow Pedagogy)」です。世界がどんどんと速くなっていく。その中でどのようにものごとをスローダウンできるか。ぱぱっとある場所を訪ねるのではなく、もっと時間をかけて学びをしっかりと固め、他とのつながりを築く。PBEには、観光客のようにさーっと見ていくのではなく、じっくり時間をかけることが必要です。

良く生きる

⑤自分が教える前に、個人としてその場でよく生きるということが必要ではないでしょうか。旅人として訪ねるにしろ、60年間住み続けるにせよ、その場の生態系やコミュニティとどう関係を持つのか。そこで自分に何ができるか。有言実行が必要。

最後にぜひやってもらいたいのは仕事の中で、小さな一つのことをする。今週はこれを、明日はあれをというちょっとしたことでもいい。5歳児の前で教える時にここをちょっと変えてみようとか工夫していくことをしてはどうか。PBEをあなた自身の状況の中に入れ込んで、小さな行動を始めてはどうでしょうか。

壁を超えよう

安藤

ルースさんの話の中でギャップという言葉が出てきました。私たちの住んでいる社会というのは本当に流動的で、どんどん動いていく。ボーダーレスと言われているけれど、実は僕たちが生きている社会というのは非常に多くのボーダーに囲まれ、あるいはギャップがあって、ある枠の中に生きている。教室という枠であったり、一時間目、二時間目という枠であったり。それが私たちが生きている近代社会、あるいは現代社会だと思います。

大事なことはギャップだとか壁を超える、そこが大きい。ある種の勇気とか志とか想いとかそういうことになっていくのではないかと思います。そのために自分自身が開かれることとか、他者とつながる事とか、そういうことの中でギャップというものを乗り越えていく。そういう中で、知っているから行動するになるのだらうと思います。

サイモンさんが最後に言われた「自分の場所でしっかり生きる」。なんて素敵な言葉でしょうか。

参加者の声（アンケートより抜粋）

①印象に残った基調講演や発表、内容、感想

*ゲストの方々のお話はとっても納得するものばかりでした。学生として、自分が何のために学び、何から学び取っているのかをもう一度確認しなくてはならないと思いました。地域全体が学びの場となり、家族から学び、自然から学び、近所の人から学ぶこと。それが実際に最も「生きる」ことに近い学びなのだと思います。自分が生きている場で豊かに過ごすために必要な事は必ずしも数学とか現代文とかそういうものではなくて、地元の長老の言葉や、自然の中で得た感動なのだと思います。（高校生、10代）

*サイモンさんの最後の5つの視点。自分の場所であり生きろ。桑子先生の合意形成（公務員、40代）

*アンバさん→地域社会が学びの場であることがわかりました。ルースさん→学校が地域や歴史や自然を学びの場としていることに感銘を受けました。（60代）

*サイモンズさん「セブンイレブンでどこの誰かが作ったかわからないお米を買ってもいいし、地域で購入したお米を買ってもいい」考えさせられるものがありました。（20代）

*「価値感」に焦点が置かれていて、興味深かったです。サイモンさんのおっしゃっていたコンビニが“sustainability nightmare”という言葉に衝撃を受けました。（学生、20代）

*「空間はものがたりを持っている」という言葉は印象的でした。質問する→調べる→共有するというのが具体的で参考になりました。（会社員、30代）

*アンバさんの話を聴いてみて、「場の教育」はシンプルであるが、それがなくなってきたということ。世界の消費システムに乗る、乗らない、それは、取り残されるということだろうか。（教育実践者、30代）

*地域活性などは、よその、バカモノが何を提案して、町の人を巻き込んで決断策を考えていくイメージでしたが、そうではなく、そこに関わっている人、住んでいる人が問題などを見つけ、考えることが大切なのだと思います。（学生、20代）

*正直、「場の教育」をあまり真剣に考えたことがなく、ちょっとしたきっかけで参加させていただきましたが、様々な視点でその大切さを実感することができました。（教員、20代）

②参加した分科会と、印象に残った言葉や感想

（自然保護活動）

*それぞれ地域で抱えている問題があり。地元の継続的な参加、つなぎ手のメンバーの育成、地域の自然を守るための住民参加の仕組み作りが、生物多様性や持続可能な社会づくりに求められているが、それが実現できていない現実と直面している。（60代）

（学校教育）

*途中からの参加でしたが、モラル形成のお話がとても印象的でした。もう少し詳しく知りたいです。（40代）

*・段取り→なるべく沢山の人の意見 ・手順→子ども、大人、おじいちゃん ・仕掛け→商人、ほんとに沢山の山の人 自分で気づき考える。（学生、20代）

*「こどもからの問い」→教育が設定せず、こどもが気づくことが大切。学術的な部分も、こどもの学びについてもっと学びたいと思いました。（会社員、30代）

（地域再発見）

*いろんな活動をしている人がいることがよくわかりました。それぞれの経験からの言葉はとても印象的でした。「都会の子ども達のふるさととは今のままでいいのか」「地域への誇りや愛着をベトナムなどでどうもてるのか」「地域活性化と観光地化の違い」など、たくさんの話題が出ました。私もこれからいろんな経験をして、自分なりの答えを出したいです。（高校生、10代）

（冒険教育）

*用意された楽しさと、自分で見つける面白さの違いについて考えさせられました。（教員、20代）

*ディズニー化、マクドナルド化 環境教育と冒険教育を考えた、冒険を教育として使う意味を考えた。場がなければ、集団体験になっていない。（NPO 勤務、50代）

③地域と学びについての考えや疑問、取り組みなど

*アンバさんの「野に立ってただけで学びがあると思う」という内容が印象的でした。その通りだと思います。アクティビティに目が向きがちですが、環境や地域があつてのことであり、そこにも目を向けるプログラムも入れることが望ましいと思います。（大学教員、40代）

*知っているから行動への行動のきっかけになる機会（タネ、場、人）を地域の中に、たくさん作っていきたいと思います。（公務員、40代）

*特に首都圏で、“地域のことを学ぶ”ことに興味を持たない人は増えていると思います。興味の無い人（あるいは興味はあるけれど行動につながらない人）にどうアプローチしていくか考えたいです。（教員、20代）